令和元年度
高知大学国際連携推進センター年報

令和元年度　年 報 目 次

国際連携推進センター基本方針……3

１．はじめに（国際連携推進センター長　新納 宏）……8

２．組織・スタッフ……１０

（１）組織図

（２）スタッフ紹介

３．活動状況……１１

３－１国際交流

（１）講演会等

① 「日本文化ビジネス」鈴木賞子（成蹊大学・成蹊教養カリキュラム全学教育講師）

② 第２回「海外危機管理シミュレーション訓練」

（２）学長等表敬訪問等……１３

① オマーン訪問団による国際連携推進センター長表敬訪問

② SUIJI 国内サービスラーニングプログラム学生の理事(教育・国際担当)表敬訪問

③ 南京航空航天大学外国語学院長による副学長表敬

④ 遠藤隆俊副学長らが安徽大学学長を表敬訪問

⑤ 櫻井学長と遠藤副学長が上海海洋大学学長を表敬訪問

（３）JICA 受託事業……１７

① 高知大学国際研修「インクルーシブ教育実践強化コース」

② 高知大学国際研修「“子どもの学びを保障する”へき地教育の振興―SDGs の達成に向けて(A)」コース

③ 高知大学国際研修「アグリビジネス/アグリツーリズム」コース

④ 高知大学国際研修「島嶼国総合防災」コース

３－２留学生交流……２１

（１）留学生交流事業

① 2019 年度外国人留学生見学旅行

② 第４回学長杯日本語スピーチコンテスト

（２）地域交流事業等……２４

① 朝倉地区区民運動会

② 朝倉小校区青少年育成協議会主催料理教室「韓国料理に挑戦！」

③ 教育学部附属特別支援学校「留学生と交流しよう」

（３）留学生支援……２７

① 新入留学生オリエンテーション

② 帰国準備説明会

（４）短期プログラム受入れ事業 ２８
① 協定校向け英語によるサマーコース
（５）海外短期留学コース ２９
① 海外語学研修　グローバルコミュニケーション（フィリピン、マレーシア）
② 海外短期研修　カセサート大学文化社会体験コース

４．進学説明会 ３１
① ジーベック 2019 年外国人留学生相談会（7/2 香川）
② ジーベック 2019 年外国人留学生相談会（7/3 岡山）
③ 2019 年度外国人学生のための進学説明会[JASSO]（7/13 大阪）
④ 大阪日本語教育センター合同進学説明会（9/6 大阪）

５．日本語授業関係（授業時間割、シラバスなど） ３３

６．出版・刊行物等 ４６
Welcome to Kochi University、Annual Bulletin（英語）、高知大学留学生教育 第 13 号、高知大学国際交流 HP、Facebook

７．会議関連 ５１
国際連携推進センター運戦略室会議、国際連携推進委員会、留学生専門委員会

８．その他 ５５
交流協定締結一覧（大学間・部局間）、外国人留学生在籍（国別）、2019 年度交換留学生数

高知大学　国際連携推進センター基本方針

設置の経緯

国際連携推進センターは本学の各部局等と連絡の上、教育・研究交流、国際協力プロジェクト及び留学生の受入れ、本学学生の海外留学・派遣などを司る。本センターは、国際プロジェクト部門と国際連携教育部門から成り、中国語センターを附置する。

新センター設置にあたり、高知大学におけるこれまでの取組み【国際交流ポリシー（平成18年4月12日役員会決定）ならびに国際交流のあり方懇（平成20年11月20日）の報告】を踏まえて、国際連携推進センターの新しい基本方針を策定し、業務の方向性を示す。

国際連携推進センターの基本方針

１．グローカルな国際連携を目指す

高知県と同様の開発課題を抱えるアジア・大洋州等の開発途上国とのつながりを重視し、教育、研究、国際貢献の面で重点化を図っていく。地域と共に学び研究する「知の拠点」として、地域から世界に発信する大学を目指す。

２．双方向の国際交流を推進する

留学生の受入のみならず、本学学生の海外留学の促進に重点を置く。ワンストップサービスを強化し、海外からの優れた留学生受入れを増やす。日本人学生と留学生が集い、互いに学びあうキャンパスを創造する。

３．地球規模の課題に対する国際協力にチャレンジする

本学の研究シーズと高知県の地域資源の特徴を生かして、国際協力を推進する。国際協力の現場を教育・研究の場としても活用し、実践的で国際的な教育・研究を発展させる。

基本方針を具体化する活動

国際プロジェクト部門

１．国際連携の分野・地域を重点化する

（１）教育、研究、国際貢献すべての側面において都市部の有力大学、大規模大学との差別化をすすめ、高知大学にしかできない、あるいは高知大学が比較的優位にある教育研究分野を明確化し、海外へ発信していく。例えば、分野としては高知県の課題解決と直結する①実践的な農業及び食品加工、②海洋資源の利活用、③防災・気象変動・環境、④保健・医療、⑤学校教育、⑥地域の社会・経済開発などがあり得る。

（２）将来の教育・研究の国際的なネットワークを強化するため、留学生受け入れにあたっては、協定校はもとより、本学の重点地域である黒潮流域圏を含む東南アジア、特に若年人口が増大を続け、高等教育への需要の高い国々からも、将来性のある優秀な学位取得を目的とする留学生を積極的に受入れる。

２．国際交流拠点を中心に国際的な研究を推進する

（１）高知大学ならではの分野・地域における研究交流を促進するため、国際化戦略経費を重点配分し、外部資金を獲得できるよう支援する。配分にあたってはネットワーク型、文理融合型のプロジェクトを優先する。

（２）文理融合の研究交流や国際協力の促進を図るため、国際化戦略経費の一部をあてて、国・県の政策や計画とすり合わせて特定の研究テーマや対象地域を決め、関心ある研究者を公募して調査を行い、国際的な共同研究を発掘する。

３．国際協力に積極的にチャレンジする

（１）教員の研究成果を国際協力に生かし、ODA 資金による国際協力活動を活発化させる。特に JICA による途上国行政官向け国際研修は、直接途上国政府とのネットワークを強化し、海外事情に容易にアクセスできるため、積極的に開発・実施する。実施にあたっては、学生に国際協力を体験させるなど、教育面での活用も考慮する。

（２）国際協力活動は、国際貢献の面のみではなく、教育・研究に様々なメリットがあり、本学の目標の遂行に不可欠である。そのため、教職員の国際協力活動が正当に評価されるような仕組みを作る。

（３）国際協力事業を形成するにあたっては、国内においては高知県の自治体、企業、NGO との連携、また、海外においては協定校との協働も視野に入れて、ステークホルダーを巻き込んだ案件に配慮する。このことによって、地域連携や協定校との連携がさらに促進される効果が期待できる。

国際連携教育部門

１．高知大学からの留学生派遣を増やす

（１）アジアの協定校からの留学生受入数に対し派遣数が少ないことから、アジアの英語共通語圏（フィリピン、マレイシアなど）の協定校への留学生派遣を増やす。また中国語圏の協定校への派遣を増やす。

（２）協定校への留学生派遣を増やすため、協定校情報の整理とパンフレット、イントラネットでの発信を強化、また学生向けセミナーを多重的に開催するなど、学生の関心を高める。

（３）留学希望者の英語力アップのため、学部等と共同で TOEFL 等対策講座の開発や支援を行うとともに、派遣数増加のために有効活用する。

（４）中国語センターを活用して、中国留学への学生や保護者の関心を高め、学生の中国語力をアップさせる。

２．日本人学生等と留学生が共に集い、共に学ぶキャンパスを創造する

（１）留学生向け行事は、日本人学生も参加可能とし、学生たち自身の企画を取り入れる。（例：日本語スピーチコンテスト、留学生による協定校紹介セミナー、学外への合同研修旅行など）

（２）高知大学ポータルサイトの国際関連部分は英語対応とし、学内のサインや看板も日・英2か国語併記とし、留学生に優しいキャンパスを実現する。

（３）日本人学生等と留学生が、常時集い情報交換できる交流スペースを確保する。交流スペースには、コンピューターや外国語雑誌、留学情報などがいつでも見られるよう整備し、留学生向けピジョンボックスを置く。

３．　留学生獲得から受入れまで、ワンストップサービスを強化する

（１）留学生の獲得に当たっては、協定校からの短期留学のみならず、質の確保を前提に JICA 留学生（修士）や私費留学生、国費留学生など長期留学生を積極的に獲得する。そのために国際連携推進センターは、留学生向けの広報ツール（外国語によるウェブサイト、パンフレット、DVD など）を開発し、国内のみならず海外での留学フェアに参加し海外大学での説明会などを開催する。また、学術交流等で海外の大学等へ出張する際にも、留学生勧奨のための活動を行うことを促進する。（例：国際化戦略経費の申請項目にも留学生獲得努力を追加するなど）

（２）教員の留学生受入/派遣の事務的負担を減らし、留学生の利便性向上を図るため、留学生受入/派遣事務は、国際連携推進センターがワンストップサービスとしての役割を担う。また、教員向け及び留学生向けの受入手続マニュアル、留学希望者向けの留学マニュア

ル、留学生受入/派遣危機管理マニュアル等を整備しイントラネット、インターネットで公開する。

（３）留学生の危機予防のため、ブリーフィング、コンサルテーションを強化する。

（４）留学生向け宿舎確保は、混住型学生寮の整備を推進するが、当面は宿舎の借上げや宿舎提供サービスの外部委託などを検討する。

別紙

活動を可能とするための学内体制の整備（今後 1～2 年）

１．国際連携推進センターに、プロジェクト形成や研究交流促進のために国際経験豊かな専任教員や事務職員を配置する。また、増大する業務に対応するため、国際連携推進センターが獲得した資金の中から、必要に応じて機動的に臨時スタッフを雇用して事務補助に当たらせる。留学生受入での宿舎手配などの定型業務は、可能な限り外部委託する。

２．国際担当の専門人材を計画的に育成するため、事務職員の海外交流協定校への派遣等も含め研修プログラムを充実する。

３．学術交流やプロジェクトの分野を絞り込み文理融合を進めるため、国際連携推進センターとして外部資金の獲得に努めるとともに、国際化のための戦略経費を増加する。国際化戦略経費は期限付きとし、あくまでも外部資金獲得の呼び水として使う。事業は毎年評価を行い、留学生獲得への貢献、外部資金獲得の努力等も評価項目に入れる。

４．キャンパスでの国際交流促進のため、他の地方国立大学並みに増床し、各教員の研究室の他に留学生交流スペース、留学生カウンセリングルームを確保する。

５．高知大学海外事務所の整理と機能強化を進める。優秀な留学生の獲得、学術交流や共同研究の促進、同窓会の組織化と支援、国際協力プロジェクトの形成などの機能をもたせる。そのために、教員の派遣を伴う海外事務所の設置を検討する。

６．海外での留学生同窓会組織を育成・強化し、海外へ派遣する本学留学生や教員との親睦を深め、高知大学の最新情報、最新の研究成果の情報を提供する。同窓会ネットワークを活用して、本学の広報と留学生の募集への協力等を依頼する。

７．学内各部局の国際連携を促進するために、全学的な国際戦略を明確化して外部公開するとともに、部局ごとの国際戦略策定を促進する。国際連携推進センターは全学的な国際戦略策定の事務局となるとともに各部局の策定を支援する。

８．センターには各部局からの兼務教員を置き、情報共有を促進する。

1．はじめに

国際連携推進センター
新納　宏

新型コロナウィルス禍と留学

2020 年 3 月、新型コロナウィルスの世界的な感染拡大の影響で、来日する予定だった外国人学生の交換留学が延期になり、海外に留学中の日本人学生も日本への帰国を余儀なくされている。留学を目指す者にとっては大変残念な事態になったが、こんな中、あえて留学の意味を問うてみたい。

なお、ここで言う留学は主に本学で最も一般的な交換留学のことである。交換留学は長くて 1 年、多くはそれより短い。はじめの 1 か月は自分の宿舎を整備し、生活の基盤を作ることで精いっぱい。授業が始まっても、はじめの 1～2 か月は先生が何を言っているかわからない。ようやく授業が理解でき始めると、今度はカルチャーショックに落ち込む。友達もできて、滞在国の文化にも慣れ、ようやく生活に少し余裕が出てきたら、もう帰国となる。

交換留学を終えた学生はほぼ間違いなく、学問のみならず人間的にも成長して帰って来る。本人たちもそう感じている。欧米圏に留学していた学生はほとんど場合、「授業での宿題が多く、単位をとるのが大変だったが、いい勉強になった」と言う。「日本の大学は甘い」とまで言う者もいる。アジア圏に留学した学生は「日本人であることを初めて認識した」、「日本というだけで興味を持ってもらった」、「毎日が異文化なので新鮮だった」、「歴史問題で意見されたこともあったが、人々から親切にされた」と日本再認識派が多い。

なぜ留学は人をひとまわり成長させるのか。

日本に留学している外国人学生に日本留学の理由を質問したことがある。学生は「自国は世界のほんの一部なので、知らない世界を探求する留学は自分にとって大きく目を開くこと」、「私の国では親の世代は自由に海外に行くことなどできなかった。親からも是非世界をもっと見てこい、と励まされた」、「日本の文化、特にマンガに影響された。実際に自分で日本を体験してみたかった」、「日本に限らず、世界中の多くの国を訪れ、文化を経験したい、自分が成長するために」、などが主な回答だった。

総じて異文化を体験できることで視野が広くなること、そして、海外との比較により自国を再発見できることが交換留学の大きなメリットと言える。それにより人間的にも幅が広がる。

学習への意欲も増進すると思われる。多くの日本人学生が語学力不足を痛感し、語学学習を始め、中には次は本格留学したいという目標を持つ者もいる。また、異文化を体験したことで自分の研究課題を深化させるなどの効果もある。これらは、単なる海外旅行とは異なり、そこに生活し、友だちができ、学習を体験できる交換留学でこそできる体験と言えよう。

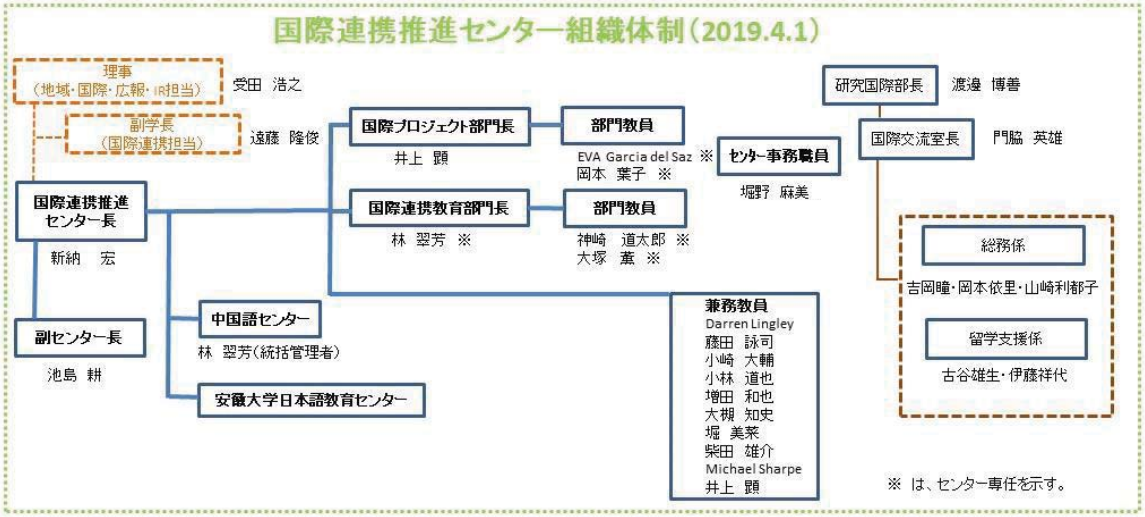
重要なことは、留学生にメタ認知機能が発達することだ。真っ暗な宇宙空間にいた宇宙飛

行士が地球を「唯一の掛け替えのない」人間の住処と確信し、そこに国境が見えなかったように、将来世代が自分、自国文化を俯瞰的に見る能力を少しでも身に着ければ、大きな収穫である。

新型ウイルス禍により、グローバル化の進んだ世界が逆に国境を閉ざし始めている。折しも、欧米では移民を避け、異文化を警戒し、国境を強化すべき、とのポピュリズムが広まっていた時期と重なった。新型コロナ禍が終息した時、世界がグローバルな多文化主義をどう維持するのか、やや不安にもなる。異文化を体験しメタ認知能力が高まった将来のリーダーたちにも是非考えてほしい課題である。

2. 組織・スタッフ（組織図、スタッフ紹介）

（1）組織図



（2）スタッフ紹介

副学長（国際連携担当）　遠藤　隆俊
国際連携推進センター長　新納　宏
副センター長　池島　耕

[国際プロジェクト部門]
国際プロジェクト部門長　井上　顕
国際プロジェクト部門専任教員（助教）　GARCIA DEL SAZ EVA
国際プロジェクト部門専任教員（特任講師）　岡本　葉子

[国際連携教育部門]
国際連携教育部門長・専任教員（教授）　林　翠芳
国際連携教育部門専任教員（准教授）　神崎　道太郎
国際連携教育部門専任教員（准教授）　大塚　薫

[研究国際部国際交流室]
国際交流室長　門脇　英雄

[国際交流室総務係]
国際交流室総務係長　吉岡　瞳
国際交流室総務係主任　岡本　依里
国際交流室総務係　事務補佐員　山崎利都子

[国際交流室留学支援係]
国際交流室留学支援係長　古谷　雄生
国際交流室留学支援係主任　伊藤　祥代

[国際連携推進センター]
国際連携推進センター係員　堀野　麻美

3. 活動状況

3-1 国際交流

（１）講演会

①講演会&ワークショップ《日本文化ビジネス》を開催

日時：2019 年 6 月 22 日（土）13:20～17:10

概要：本学「国際連携推進センター主催の講演会＆ワークショップ」及び「高知地域留学生交流推進会議研修会」として『日本ビジネス文化』を開催し、本学留学生や県内大学の留学生、また日本人学生や県内外の教職員など合計 30 名ほどの参加がありました。

講師には、成蹊大学（成蹊教養カリキュラム全学教育講師）より鈴木賞子氏をお招きし、遠藤副学長（高知地域留学生交流推進会議運営委員長）による開会挨拶の後、日本における就職活動の基本や特徴などについて講演いただきました。講演会では、留学生の日本での就職活動の基本や特徴の他、企業が留学生を積極的に採用する理由や企業が求める人材と留学生への期待などについて幅広く解説いただきました。講演会後のワークショップでは、実際の採用選考の場で行われるグループワーク・グループディスカッションを体験することにより、参加者からは「日本で就職をしようと考えたときに、どのようなことを行いどんなことを考えたらいいのか、とても参考になった」、「わかりやすく具体的なお話でした」等の感想が寄せられました。

講師：鈴木賞子先生

講演会の様子

グループワークの発表

②第 2 回「海外危機管理シミュレーション訓練」を実施

日時：2019 年 11 月 6 日（水）

概要：令和元年 11 月 6 日（水）、本学の朝倉キャンパスで、学生海外派遣に関する危機管理シミュレーション訓練を実施し、学長、理事、副学長、学部長等をはじめ教職員 43 名が参加しました。

本学では、グローバル人材の育成を目的として学生の海外派遣を推進しており、学生の海外派遣数の増加及び派遣先の多様化に伴い、海外で事件や事故に巻き込まれるリスクが高まっています。そこで、万一の事態に迅速且つ的確に対応するため、危機管理会社の協力を得て、今回、平成 29 年度の第 1 回開催に続き「海外危機管理シミュレーション訓練」を実施しました。

事故の設定は、米国での語学研修に参加の学生 8 名と引率教員 1 名が、バスで移動中に事故に巻き込まれたというもので、休日に現地から大学に事故の第一報を受け限られた少人数の教職員が参集したという設定で初動対応訓練を行いました。その後、危機対策本部を立ち上げ、本部及び 5 つの班（学生・家族班、現地班、渉外班、学内庶務担当班、情報収集班）の教職員は次々と入る現地等からの情報をもとに記者会見を開くまで、3 時間にわたり実際の対応を疑似体験しました。

今回の訓練における反省点を踏まえ、緊急時の対応マニュアルをより実効性の高いものとなるよう改善するとともに、学生海外派遣に関する安全管理体制の充実・強化を図り、学生の海外派遣をより万全の体制でサポートできるよう努めていきます。

危機管理会社による事例の解説

班担当者による危機管理本部での
情報収集の様子

（２）学長等表敬訪問等

①オマーン訪問団による国際連携推進センター長表敬訪問

日時：2019 年 7 月 5 日（金）

概要：オマーン国で幼稚園から高校までの私立一貫校を設立した日本人女性スワーダ・アル・ムダファーラ（旧名：森田美保子）様と学生ら 12 名が新納国際連携推進センター長を表敬訪問しました。学生らは新納センター長による高知の文化や風土についての講和を熱心に聞き、情報収集を行っていました。一行は 7 日まで県内に滞在し、高知大学生をはじめ県下の中高生との交流を行いました。

新納センター長による講和

集合写真

②SUIJI 国内サービスラーニングプログラム学生らによる理事表敬及び成果報告

日時：2019 年 8 月 29 日（木）

概要：インドネシア（ガジャマダ大学４名、ボゴール農業大学 2 名、ハサヌディン大学 2 名の計 9 名）とマレーシア（プトラ大学 6 名）からサービスラーニングプログラム受講のため高知を訪れている留学生及び本学学生の計 30 名が、受田理事（地域・国際・広報・IR 担当）を表敬訪問しました。

受田理事による歓迎の挨拶の後、安田サイト及び室戸サイトからの学生全員による活動報告が行われ、それに対して 3 カ国の学生による活発な意見交換が行われました。最後に受田理事からも質問や感想が述べられ、盛会のうちに終了いたしました。

一行は滞在中、愛媛大学及び香川大学の各サイトに参加した SUIJI サービスラーニング履修者と合流し、最終成果報告会においてサービスラーニングで得た知見を発表し、他のグループの学生らと交流しました。

受田理事による歓迎の挨拶

学生による各サイトでの活動報告

集合写真

③南京航空航天大学外国語学院長による副学長表敬

日時：2019 年 10 月 31 日（木）

概要：本学の協定校である南京航空航天大学（中国）より範祥涛外国語学院長と竇碩華副教授が遠藤副学長を表敬訪問しました。遠藤副学長から歓迎の挨拶の後、範院長より本学に南京航空航天大学から継続的に交換留学生を受け入れていることに対し感謝の辞が述べられました。また、今回の表敬訪問には、本年 9 月に南京航空航天大学へ研究留学していた本学修士課程の学生も同席しており、同大学のサポートのおかげで不自由のない研究環境だったとの感想を述べていました。

　そのほか、今後の学生交流や研究交流の発展に向けた意見交換を行いました。

懇談の様子

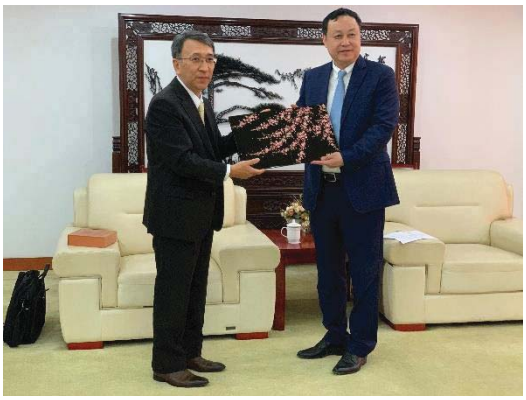
左から竇副教授、範院長、遠藤副学長、
恩田理工学部講師、本学修士課程学生

④遠藤隆俊副学長らが安徽大学学長を表敬訪問

日時：2019 年 11 月 21 日（木）

概要：遠藤隆俊副学長と林翠芳国際連携推進センター教授が、本学の協定校である安徽大学（中国）の蔡敬民書記を表敬訪問しました。今回は、高知県安徽省友好交流２５周年記念訪問団として、高知県文化生活スポーツ部の橋口欣二部長はじめ、高知工科大学や高知県立大学などの関係者とともに訪問しました。初めに蔡書記と橋口部長から挨拶があり、次いで高知県及び本学をはじめとする三大学が記念品の交換を行いました。

表敬訪問の後には、訪問団と外国語学院日本語学科の学生と交流会があり、遠藤副学長が「日中文化交流の歴史－高知の漢籍とブックロードー」の題目で講演を行いました。次に、日本から安徽省訪問団に参加した学生による発表が行われ、本学からは土佐さきがけプログラム国際人材育成コースの飯田里奈さん、棚田陽香さん、藤夢人さんの三人が、高知のよさこい踊りについて発表しました。最後に、三人による演舞指導のもと、出席した安徽大学の学生全員が正調よさこいを踊り、なごやかな雰囲気の交流会となりました。



遠藤副学長と蔡敬民書記

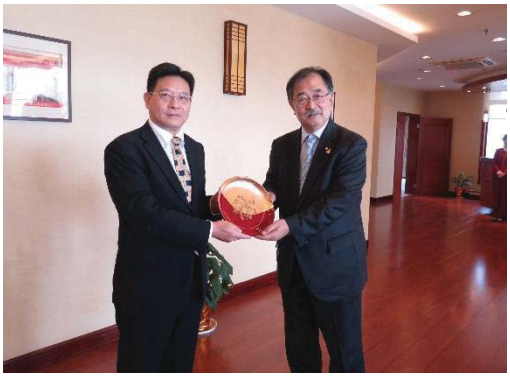
本学学生による発表の様子

安徽大学の学生へのよさこい演舞指導の様子

⑤櫻井学長と遠藤副学長が上海海洋大学学長を表敬訪問

日時：2019 年 11 月 23 日（土）

概要：櫻井克年学長及び遠藤隆俊副学長が本学の協定校である上海海洋大学（中国）の程裕東学長を表敬訪問しました。当日は、程学長のほか国際交流担当の万栄副学長、国際交流秘書長の鐘俊生教授、外国語学院の趙凌梅教授が出席しました。まず程学長から歓迎の挨拶と上海海洋大学の現況説明があり、”双一流”（大学または学部、学科、分野での一流大学）を目指している旨が述べられました。次いで櫻井学長からは高知大学の状況、特に地域、海洋、防災への取り組みやスーパー・リージョナル・ユニバーシティーの構築へ向けた抱負が語られました。また遠藤副学長からは交換留学生の受け入れの状況について説明があり、万副学長からは海洋科学や黒潮圏に関する研究交流の希望が出されました。高知大学大学院修了生でもある鐘教授からは、大学院留学生の交換と高知大学帰国留学生留学生ネットワーク（中国）の開会について説明がありました。



程裕東上海海洋大学長と櫻井克年高知大学長

集合写真

（３）JICA 受託事業

①高知大学国際研修「インクルーシブ教育実践強化コース」を実施

日時：2019 年 4 月 9 日（火）－ 4 月 26 日（金）

概要：この研修コースは政府開発援助（ODA）の一環として、独立行政法人国際協力機構（JICA）と本学が連携し実施したもので、当該専門分野の知見と経験を活かした講義や教育現場の視察を通じ、自国で応用できるインクルーシブ教育の強化策を修得することを目的としています。今回、中南米 11 カ国からこの分野に携わる行政官および現職教員 18 名が研修員として参加しました。

研修は日本のインクルーシブ教育の専門家による講義を通して、日本のインクルーシブ教育および特別支援教育の制度について理解を深める内容で、ディスカッションにより日本と自国を比較することにより、自国の課題整理に繋げることを目的としています。また、高知県内の特別支援学校や小学校、中学校を訪問し、授業の様子や学校施設等の見学を行い、日本のインクルーシブ教育及び特別支援教育の現場から体験的に学ぶことが可能となっています。

17 日には、「インクルーシブ教育国際セミナー2019」に参加し、インクルーシブ教育先進国の北欧における実践について学ぶ機会を設けました。

研修の最後には研修員がそれぞれ自国におけるインクルーシブ教育について課題整理を行ったことについて、今回の研修成果として実践するためのアクション・プランを作成し、日本での学びの成果を持ち帰りました。

研修員からは「視察での学びは非常に大きい。自国で活用できるアイデアや戦略を学んだ」、「先生が変わっても継続した指導計画を続けられるように個別指導計画を作成し、生徒の状況の詳細を知る重要性を学んだ」といった声が聞かれ、満足度の高い評価を得られました。

三里中学校　視察訪問

アクションプラン作成準備

インクルーシブ教育国際セミナー2019

閉講式記念撮影

②高知大学国際研修「“子どもの学びを保障する”へき地教育の振興―SDGs の達成に向けて（A）」コース

日時：2019 年 7 月 4 日（木）－ 7 月 26 日（金）

概要：本研修コースは、政府開発援助（ODA）事業の一環で、日本におけるへき地教育の現状や取組みを学ぶことを通して、“子どもの学びを保障する”ための自国の抱える課題に対する解決方法を見出すことを目的としています。

今回の研修では、へき地教育に携わる開発途上国の行政官や現職教員など 13 ヶ国から 15 名が参加し、日本の振興政策と高知県における経験と取組みについて学びました。

高知県教育センターや本学での講義ののち、高知市立義務教育学校行川学園や本学教育学部附属小学校を訪問し、講義で学んだ教育行政や教育制度の理論を実践する場を視察しました。さらに、講義や視察を通じて学んだことから実際に指導案を作成し、それを用いた模擬授業を実施することによって、実際の教育現場で行われている複式学級の指導方法を体験的に学びました。

研修の最後には、研修からの学びを応用してどのように実践していくかについて、研修員自身がそのアクションプランを作成し、発表会では多岐にわたる提案がなされました。

複式授業の作り方講座

附属小学校複式授業視察

複式模擬授業

閉講式集合写真

③高知大学国際研修「アグリビジネス/アグリツーリズム」コース

日時：2019 年 8 月 29 日（木）－ 9 月 10 日（火）

概要：本研修コースは、政府開発援助（ODA）事業の一環で、農業を多面的に活用した中小規模の地域振興ビジネスに焦点をあて、高知県内での取組みについて講義や視察、実習を通して学び、自国の抱える課題に対する解決方法を見出すことを目的としています。

今回の研修では、35 歳以下の若手行政官 9 ヵ国 13 名が参加し、自治体、農協、中小企業及び NPO など、それぞれ異なる形態の組織における取組みについて学びました。

産官学民の連携による産業振興の政策や取組みについての講義や、地域資源を活用した中小規模ビジネスの展開についての視察や体験を取り入れたことで、研修員の理解をより深めてもらうことができました。

研修の最後には、研修からの学びを応用して自国のアグリビジネス/アグリツーリズムを改善するためのアクションプランを作成し、発表会では多岐にわたる提案がなされました。

日曜市視察

JA 南国収穫作業機体験

グループディスカッション

閉講式集合写真

④高知大学国際研修「島嶼国総合防災」コース

日時：2019 年 11 月 7 日（木）－　12 月 17 日（火）

概要：本研修コースは、政府開発援助（ODA）事業の一環で、自然災害による被害の多い島嶼国における防災対策に焦点を当て、様々な防災手法を講義や視察を通して学び、自国の抱える課題に対する解決方法を見出すことを目的としています。

今回の研修では、島嶼国から防災担当行政官など 16 ヶ国から 18 名が参加し、東京都、沖縄県、高知県において、国、自治体、自主防災組織などの防災の取組みについて学びました。

東京都で国の防災政策について講義を受けたのち、沖縄県では、台風による海岸浸食や高潮に対する対策を学び、高知県各地では、風水害による土砂災害及び地震・津波対策について講義や視察を行い、地理的条件の異なるそれぞれの防災の取組みについて理解を深めてもらうことができました。

研修の最後には、研修からの学びを応用して自国の防災対策を改善するためのアクションプランを作成し、発表会では多岐にわたる提案がなされました。

東京臨海広域防災公園にて防災体験学習

琉球大学での津波実験

久礼小学校で児童と防災学習

閉講式集合写真

3-2 留学生交流

（１）留学生交流事業

①2019 年度外国人留学生見学旅行

日時：2019 年 11 月 17 日（日）

概要：今年度新たに入学した外国人留学生を対象に香川県の中央に位置する四国霊場 75 番札所の善通寺と仲多度郡琴平町にある中野うどん学校、金刀比羅宮への見学旅行を日帰りで実施しました。見学旅行は外国人留学生が日本及び地域の歴史・文化を学び理解を深めるとともに、留学生間の親睦・交流を図ることを目的としており、留学生 51 名、教員 4 名が参加しました。

善通寺では、まず弘法大師空海が産まれた場所である御影堂の地下に続く階段を降りていきました。階段の先の地下には真っ暗闇が続いており、約 100 メートルの通路をめぐる「戒壇めぐり」を体験しました。留学生は何の前触れもなく真っ暗な通路に入っていき、最初は驚いていましたが、中央の大日如来像が安置されている部屋までたどり着くとほっとしたような表情を浮かべていました。また、「戒壇めぐり」は真っ暗な中を進み自分を見つめ直す精神修養の場だということを説明すると、納得したようにうなずいていました。その後、宝物館で貴重な経典や仏像を見物したり、本堂で思い思いに参拝したりし、四国のお遍路さんの文化に触れる良い機会になりました。

中野うどん学校では、講師の先生がうどんの作り方や粉と水や塩の季節による分量の違い等について説明され、その後グループに分かれてうどん作りに挑戦しました。名物の音楽に合わせてリズミカルに生地を足で踏む場面では、会場が一気に熱気に包まれました。体験後、それぞれのグループで作ったうどんを食べて、興奮冷めやらぬままうどん学校を後にしました。

午後は事前にもらった見学旅行のしおりを片手に、琴平町界隈にあるお土産屋さんの特産品を堪能しつつ、金刀比羅宮の本宮に続く 785 段の階段を時間が許す限り上っていきました。丁度紅葉が色づき始めた季節で、ところどころに点在する紅葉の景色が美しく、往復のバスの旅を短く感じさせるほどでした。

参加した留学生からは「戒壇めぐりは真っ暗な中で自分が見つけられ、一番有意義な時間でした」、「善通寺の景色と建物が素晴らしかったし自分の国の寺とはまた違う神聖なお寺が感銘深かった。日本の仏教の文化遺産を直接見られた点が勉強になった」、「うどんを作ったのは初めてですが、グループで協力し音楽に合わせて生地を踏み、皆盛り上がっていました。うどんの食べ方も勉強しました」、「みんなで一生懸命作ったうどんだから、もっと意味があり、もっとおいしかった」、「金刀比羅宮の山頂まで登り、本当に疲れたが楽しかった。登っていくうちにいろいろな風景が見られ、とても達成感があった」、「今回の見学旅行の雰囲気が良くて、みんなの交流が増えました」などの感想が寄せられ、留学生にとって大変有意義な見学旅行となりました。

善通寺(境内を散策する留学生)

中野うどん学校

②第 4 回学長杯日本語スピーチコンテスト
日時：2019 年 12 月 4 日（水）
概要：高知大学朝倉キャンパスメディアの森 6 階メディアホールにて第 4 回高知大学学長杯留学生による日本語スピーチコンテストが行われました。中国 4 名、米国・インドネシア・韓国・台湾・モンゴル・ラオス各 1 名の計 10 名の本学で学ぶ留学生が「私を変えた言葉・人・出来事・瞬間」というテーマの下、発表しました。会場には、学内外からおよそ 80 名の観衆が集まり、櫻井学長の挨拶に始まり、地域の国際交流団体や学生団体、会場の参加者も審査に加わり、厳粛な中にもどこか和やかな雰囲気の中、進行していきました。

発表者は、今までの人生を振り返り、現在の自分になったきっかけや将来の希望に関して内容の構成を考えながら、身振り手振りを交えて堂々とした発表を繰り広げました。観衆はそれぞれの発表者の個性あふれるスピーチに魅了され、大きな拍手を送っていました。

最優秀賞には、「自信の音色」と題して、高知大学に留学してから入った音楽サークルでの経験から将来の夢にもつながる成長を実感したと語った米国からの留学生である医科学専攻 2 年生のティファニー由佳ポールファスさんが選ばれ、賞状とトロフィー、記念品が手渡されました。優秀賞は、モンゴルからの留学生である人文社会学部 2 年生のバトバヤル・フランさんが「幼稚園のバレンタインデー」というタイトルで受賞し、幼稚園のときのバレンタインデーで他の人に対する思いやりの心を学び、成長のきっかけとなったという思い出を語ってくれました。審査員特別賞は、韓国からの交換留学生の金在賢（キム ジェヒョン）さんで、優柔不断だった自分の価値観が大きく変わった二つの出来事を「遅さに対する責任」という題目で紹介してくれました。発表者からは、「盛大なスピーチコンテストに出場できて良い勉強になりました。他の人の発表を聞いて自分の不十分な点を知り、とても良い経験になりました」、「すごく緊張していたのですが、非常に有意義な経験になりました」、「今回出場できて良かったと思います。次回機会があれば、また参加したいです」という感想が寄せられました。

発表者のスピーチを食い入るように聞いていた参加者からは、「多くの留学生が一生懸命緊張を克服しながら堂々と発表するのは素晴らしい」、「声色も良く、リズムもあり、すごく迫力のあるスピーチを拝聴できた」、「個性的なスピーチを聞けて、異文化を感じることができて良かった」、「普段あまり知らない留学生がどんな人なのか知る機会になった」、「発表者は皆自分なりの観点から様々な素晴らしい意見を表明した。スピーチコンテストを通して自分の日本語の弱点を認識した。今後も謙虚に改善する姿勢を持ち日本語の勉強に取り組みたい」、「発表者が暗唱して発表しているのを見て事前の準備をしっかりと行ったことが分かった。緊張しているにもかかわらず最後まで頑張っている姿を見て、今回のスピーチコンテストは発表者にとって自分が成長するきっかけになると思った。ジェスチャーを駆使した表現力豊かな発表を見習い、自分も表現力に磨きをかけたい」など多くの感想がありました。

最優秀賞を受賞したティファニーさん

優秀賞を受賞したフランさん

受賞後の留学生と審査員

（２）地域交流事業等

①朝倉地区区民運動会

日時：2019 年 10 月 13 日（日）

概要：高知大学朝倉キャンパス近隣にある高知市立朝倉小学校グラウンドにて開催された「朝倉地区区民運動会」に本学留学生 16 名（出身国・地域：インドネシア、スウェーデン、中国、韓国、台湾）が参加し、スポーツを通して地域住民との交流を図りました。

朝倉地区内を５つに分けた各地区チームに３～４名ずつの留学生が参加し、ほぼ全ての地区対抗戦の競技に出場させていただきました。「パン食い競争や風船割りなど面白い競技があって楽しかった！」「地域の子供たちともたくさん話せたり、遊んだりして日本語の勉強にもなった」などの感想が寄せられた他、地域住民からは「留学生の若い力にたくさん助けられた。次年度もまたぜひ参加してほしい」などの要望もあり、また地域の皆様と一緒に昼食をとるなど普段なかなか交流できない貴重な交流の機会になりました。

準備体操：はじめての「ラジオ体操第一」

落とさないように！「竹の宅急便」

運動会といえば「100m 走！！」

跳んだり潜ったりの「ダイエット大作戦」

チーム一体となった「ダンシング玉入れ」

白熱した竹棒の争奪戦「竹取物語」

②朝倉小学校区青少年育成協議会主催料理教室「韓国料理に挑戦！」

日時：2020 年 1 月 25 日（土）

概要：朝倉小校区青少年育成協議会主催による朝倉中学校の生徒を対象にした料理教室が、朝倉ふれあいセンターにて開催されました。今回のテーマは「韓国料理に挑戦！」で、本学の韓国からの留学生、權赫文さん、金在賢さん、高恩庶さん、林修嬪さん、金テヒョンさんが講師に招かれ、「チーズタッカルビ」、「チャプチェ」、「海鮮ネギチヂミ」、「わかめスープ」の作り方を指導しました。朝倉中学校の生徒たちは、料理の作り方の説明に熱心に耳を傾け、レシピを見て質問しながら韓国料理作りにチャレンジしました。料理はなかなかの出来栄えで、参加者一同で試食しました。試食の前に韓国語の簡単な挨拶も紹介され、皆で「チャル モッケスムニダ（いただきます）」と言ってから、自分たちで作った力作を味わいました。そして、試食後は「チャル モゴッスムニダ（ごちそうさまでした）」と挨拶し、皆満足した表情を浮かべていました。

中学生からは、「ヘルシーでボリュームがあって辛いけどおいしい」、「チヂミ作りをマスターしたので家でも作りたい」との感想が寄せられました。講師を務めた学生からは、「今日は韓国のお正月にあたり、正月早々皆さんと楽しみながらおいしい料理が作れて嬉しかった。これを機に、隣りの国、韓国についても興味を持ってもらいたい」との感想がありました。当日は中学校の生徒たちだけでなく、朝倉中学校の先生及び青少年育成協議会のメンバーも参加され、食を通じて国際交流、異文化理解を図ることができました。

料理の作り方の指導

料理を作っている様子

完成した韓国料理

皆そろって試食

③教育学部附属特別支援学校「留学生と交流しよう」

日時：2020 年 2 月 21 日（金）

概要：教育学部附属支援学校の中学部 1 年生の総合的な学習の時間に行われた「留学生と交流しよう」に本学の留学生 3 名が参加しました。今回の活動は、世界の文化等を学び、広い世界があることを感じとるという目的で行われ、中国から陳柯君さん、インドネシアからインタンさん、カンボジアからマネットさんが交流会に参加しました。

まず、皆で大きな円になって座り、それぞれが一言ずつ自己紹介をしました。その後、留学生が自分の国の有名な観光地や食べ物の写真を見せながら、それぞれの国の紹介をし、生徒からの質問に答えました。その後、事前に用意してきた自分の名前と好きなもの、得意なものが書かれた名刺を皆で交換しあいました。そして、生徒と留学生、教育実習生がペアになり、協力しあいながら双六ゲームをしました。生徒が作ったユニークなミッションにドキドキしながらサイコロを振り、時にキラキラ星を日本語と中国語で歌ったり、次の番が来るまで体育座りをしたり、オオカミの鳴き声を真似たりと非常に盛り上がりました。ゲーム終了後、生徒が一生懸命作った蒸しパンを皆でいただきながら歓談する頃には、皆すっかり仲良くなっていました。留学生が帰る際には手作りのプレゼントが渡され、手を繋いで玄関まで送ってくれ、「今度インドネシアに行きます！」、「また会いましょう！」と声を掛けあい、皆笑顔が溢れていました。

留学生も「皆元気が良くて純粋に交流を楽しんでくれて短い時間だったが、とても楽しかった」という感想が寄せられました。当日は、生徒の他に教育実習生も交流に加わり、それぞれが異文化を知るきっかけになり交流が深められ、充実した時間を過ごすことができました。

自己紹介

双六ゲーム

（３）留学生支援

①新入留学生オリエンテーション

日時：（第 1 学期）2019 年 4 月 5 日（金）、4 月 8 日（月）
　　（第 2 学期）2019 年 9 月 20 日（金）、9 月 25 日（水）

概要：各回の内容は下表のとおりです。また、オリエンテーションに合わせてウェルカムパーティーを開催し、新入留学生と在来留学生、日本人学生が情報交換するなど懇親を深めました。

2019 年度新入留学生オリエンテーション
第 1 回
○国際連携推進センタースタッフ紹介 ○留学生活についての諸注意 ○学生教育研究災害傷害保険の加入 ○えんむすび隊の紹介 ○高知大学生活協同組合からの案内 ○銀行口座開設手続き※希望者のみ
第 2 回
○情報セキュリティ講習 ○保健管理センターからのお知らせ ○学生総合支援センターからのお知らせ ○防犯・交通マナー教室：高知南警察署 ○防災講演: 高知大学防災すけっと隊 ○学生グループ「国際茶屋」の紹介

②帰国準備説明会

日時：（第 1 学期）2019 年 7 月 3 日（水）
　　（第 2 学期）2020 年 1 月 8 日（水）

概要：2015 年度第 2 学期より、留学期間を終えて帰国する交換留学生を対象とした帰国準備説明会を開催しています。

国際交流室担当職員から、学内手続き関係（帰国日時の連絡、帰国後の連絡先、貸出物の返却など）、市役所での手続き（住民票転出届及び国民健康保険証の有効期限変更）、銀行等での手続き（銀行（郵便局）口座の解約）、住居の手続き（宿舎等退去手続き、部屋の点検、家賃支払い、電気・ガス・水道代・インターネットの解約と支払い、部屋の片づけ、ゴミの分別・処分）、携帯電話の解約、在留カードの返還など、帰国前に留意しておいてほしいことについて、丁寧に説明を行いました。また、今後の留学生支援に活かすため、修学や生活上の良かったことや困ったことなどについてアンケートを実施しました。

最後に国際交流室から、留学終了後も帰国留学生ネットワークの活動やホームページ、Facebook などを通じて、高知大学とのつながりを継続してほしいと伝えました。

（4）短期プログラム受入れ事業

①協定校向け英語によるサマーコース

実施期間：2019 年 7 月 1 日(月)～2019 年 7 月 13 日(土)

概要：国際連携推進センターは 2019 年 7 月初旬の約 2 週間、英語圏の協定校を対象に日本文化体験のサマーコースを高知県内で開催し、11 人の留学生が参加しました。ノルウェー、イギリス、アメリカ、マレーシア、タイ、韓国などの学生です。

目的は、英語を媒介言語として、多様な日本文化を体験し、その基にある日本の心を理解してもらうことです。フィギュア・アートから座禅まで文化の諸相を短期間で体験できるコース内容としました。また、多くの日本人学生が留学を希望する英語圏協定校の学生参加により、派遣・受入れのバランスをとることも目的のひとつです。

内容は日本語会話入門、伝統文化（生け花、尺八など)、サブカルチャー（フィギュア・アート)、自然観察（室戸ジオパークなど)、また、しました。本学学生が高知市街案内をしたほか、土佐山学舎を訪問し、小中生との交流も行いました。終了時アンケートでは、参加留学生の参加動機は漫画文化・日本食から歴史宗教まで幅広かったものの、すべての学生が目的を達成したと回答しました。

高知大生の案内で高知城見学

リブル先生による尺八演奏

竹林寺で和尚さんの指導で座禅

講義風景

（5）海外短期留学コース

2019 年度、センターが実施した海外短期留学コースは下表の 6 コース。そのうち、2 コースについて概要を紹介します。

2019年度　国際連携推進センター主催　海外短期留学コース実施実績

タイプ	プログラム名称	派遣先機関名	協定有無	派遣国(都市名等)	使用言語	滞在形式	実施期間		参加費概算	参加人数	単位付与	主な内容
							時期	日数	(保険料別)			
文化体験	カザフスタン世界遺産スタディコース	カザフスタン国立大学	有	カザフスタン(アルマティ)	日本語	寮	2019年.8月18日～8月30日	13日間	6万円 受講料+宿泊費(航空賃、食費別)	3人	無	シルクロードの中心、カザフスタンの世界遺産を視察し、同国の観光への提言を行う。
語学･文化研修	韓国語短期研修	釜山外国語大学校	有	韓国(釜山)	韓国語	寮	2019年8月8日～27日	3週間	14万円 授業料+宿泊費 (航空賃、食費別)	1人	無	韓国第2の都市釜山での韓国語講座･学生交流･文化体験研修。入門レベルでも参加可。
文化・ビジネス体験	タイ観光ビジネス+文化体験コース	カセサート大学	有	タイ (バンコク)	英語	ホテル	2019年2月16日～2月28日	16日間	10.5万円 受講料+宿泊費 (航空賃、食費別)	9人	無	観光立国タイで、仏教やムエタイなどのの文化体験とホテルや運輸ビジネスの体験実習。
語学研修 (英語)	英国語学研修	Olivet English Language School	無	英国 (ブライトン)	英語	ホームステイ	2019年3月14日～3月25日(最長)	約5週間	例:4週間42万円授業料+宿泊費+航空賃	4人	無	英語圏での本格的英語研修、能力別クラス編成で、初心者も可
語学研修 (英語)	グローバルコミュニケーション(フィリピン)	3D Academy	無	フィリピン (セブ)	英語	寮	2019年8～9月（学校、コースにより異なる）	3週間～選択可	例：3週間12万円 授業料+宿泊費+食費 （航空賃別）	4人	有	個人レッスンを中心とした合宿型英語研修。学習内容は個々の要望に応じてカスタマイズ可。
語学研修 (英語)	グローバルコミュニケーション(マレーシア)	ELC/EMS	無	マレーシア (クアラルンプール)	英語	アパート	2019年8～9月（学校、コースにより異なる）	4週間～選択可	例：4週間 9万円～16万円 授業料+宿泊費(航空賃、食費別)	13人	有	少人数編成のクラスで英語を学ぶ。一般英語から各種試験対策まで様々なコースがある。

①海外語学研修　グローバルコミュニケーション（フィリピン、マレーシア）

実施期間：2020 年 8 月～9 月（任意の 3 週間～）

概要：高知大学国際連携推進センターの希望者全員留学の試みの一つとして、共通教育教養科目「グローバルコミュニケーション」を企画・実施しました。1 学期開始後まもなく履修説明会を行い、3 カ国 4 コースを研修地として募集を行いました。その結果、学部生計 17 名 （オーストラリア 0、フィリピン 4、マレーシア 13） の申込がありました。参加者は 2019 年 8～9 月の夏季休業期間中に 2 カ国 3 カ所の研修地に赴き、各々が希望する語学学校に 3～8 週間通いながら英語学習を行いました。事前・事後学習中に受験した TOEIC Listening & Reading（IP 含む）または IELTS のスコアを比較した結果、87.5%の学生が研修前より高い成績を収めました。残り 12.5%は渡航前と同じスコアででした。また帰国後実施した履修者アンケートの結果、コース全般に関する高い満足度が示されました。

ELC（クアラルンプール）の多国籍なクラス

②海外短期留学　カセサート大学タイ文化社会体験コース

実施期間：2020 年 2 月 16 日(日)～2020 年 2 月 28 日(金)

概要：2020 年 2 月国際連携推進センターでは、希望者全員留学の短期コースのひとつとして、カセサート大学と共同でタイ文化社会体験コース実施しました。

タイ文化・社会を体験的に学ぶこと、海外の大学生活を理解し、同年代の学生と交流することで、さらなる留学への興味・関心を持たせることが目的です。1 年生から 4 年生まで合計 9 名の学生が参加しました。

日程は約 3 週間で歴史・文化・社会すべてを短期間に体験するもので、夜もナイトマーケットやリバークルーズなどもある盛たくさんのプログラム。帰国後アンケートでは、学生のほとんどが上記目的を達成し、全員がタイまたはアジアにさらに留学したいと回答しました。

バンコクの仏教寺院にて

カセサート大学内でのセミナー

一流ホテルのマネジメントを視察

チャオプラヤ川河口のマングローブ

4. 進学説明会

①ジーベック　2019 年度外国人留学生進学相談会(香川)

日時：2019 年 7 月 2 日（火）13:45～16:00

概要：高松にて、国立大学 2 校（本学の他、香川大学)、私立大学 7 校（岡山商科大学、高松大学、大阪産業大学、神戸医療福祉大学、京都ノートルダム女子大学、愛知大学、徳山大学)、専門学校 8 校が集まり、外国人留学生のための進学相談会が開催されました。

各大学のブースにて留学に関する個別相談が行われ、高知大学のブースには 10 名の学生が訪れ、真剣に質問をし説明に聞き入っていました。学部志望者が 8 名、大学院志望者が 2 名で、人文社会科学部（特に社会科学コース）への進学希望者が多く見受けられました。相談者の中には是非オープンキャンパスに訪れたいという学生もおり、本学への受験を真剣に考えている質の高い学生がいる傾向がありました。

②ジーベック　2019 年度外国人留学生進学相談会(岡山)

日時：2019 年 7 月 3 日（水）10:45～13:45

概要：岡山にて、国公立大学 6 校（本学の他、香川大学、滋賀大学、島根大学、県立広島大学、高知県立大学)、私立大学 10 校（岡山商科大学、就実大学、大阪産業大学、神戸医療福祉大学、京都ノートルダム女子大学、天理大学、四日市大学、愛知大学、愛知産業大学、徳山大学)、専門学校 10 校が集まり、外国人留学生のための進学相談会が開催されました。

各大学のブースにて留学に関する個別相談が行われ、高知大学のブースには 18 名の学生が訪れ、真剣に質問をしメモを取りながら聞き入っていました。学部志望者が 14 名、大学院が 4 名で、人文社会科学部及び理工学部への進学希望者が多く見受けられました。相談者から複数の学科が受けられるかという質問もあり、本学への受験を真剣に考えている学生が多い傾向がありました。

③JASSO　2019 年度外国人のための進学説明会(大阪)

日時：2019 年 7 月 13 日（土）10:00～16:00

概要：梅田スカイビル　TOWER WEST 3F ステラホールにて、大学等への進学を目指している外国人学生等を対象に、137 機関が参加した日本学生支援機構主催の進学説明会が行われました。当日の全体の参加人数は 2,004 名で、本ブースを訪れたのは日本語学校教員数名も含めて 43 名でした。うち、大学院への進学希望者が 4 名でした。

進学指導者	8 名
留学生	35 名
国籍	中国:26 名　台湾:2 名　ﾍﾞﾄﾅﾑ:4 名　ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ:1 名　ｱﾒﾘｶ:1 名
希望学部 (複数回答)	人文社会科学部:21 名 理工学部:6 名 医学部:2 名 農林海洋科学部:3 名

④大阪日本語教育センター合同進学説明会（大阪）

日時：2019 年 9 月 6 日（金）14:30〜17:00

概要：国公立大学及び私立大学（本学の他、秋田大学、愛媛大学、大阪学院大学、大阪観光大学、大阪教育大学、大阪工業大学、大阪国際大学、大阪産業大学、大阪女学院大学、京都精華大学、近畿大学、神戸情報大学院大学、滋賀大学、信州大学、帝塚山大学、東海大学、徳島大学、徳島文理大学、長浜バイオ大学、名古屋商科大学／大学院、奈良女子大学、羽衣国際大学、阪南大学、兵庫県立大学、福井工業大学、三重大学、桃山学院大学、流通科学大学、和歌山大学、近畿大学工業高等専門学校）31 校が集まり、大阪日本語教育センター合同進学説明会が行われました。

高知大学の会場には 10 名の学生が訪れました。理工学部への志望者が多くそのうち半数は、編入及び大学院への進学希望者でした。会場では 2020 年版大学案内、2020 年度私費外国人留学生募集要項等を配布し、数名の希望者から複数学科の受験ができるどうか、出願時の日本留学試験の最低合格ラインなどの他に、過去問が入手できるかどうかについての質問もありました。

5.日本語授業関係（授業時間割、シラバス等）

＜2019年度第1学期国際連携推進センター日本語総合コース授業時間割＞

2019年度第1学期国際連携推進センター教員（専任・非常勤）担当日本語授業時間割

時限	開講キャンパス等	月(MON)	火(TUE)	水(WED)	木(THU)	金(FRI)
I 8:50～10:20	日本語集中(朝倉) 日本語総合(朝倉) 日本語総合(物部) 日本語総合(岡豊) 共通教育		ビジネス日本語(林) 日本語初級Ⅱ(伊藤)	中級会話Ⅰ(池)	日本語初級Ⅱ(伊藤)	
Ⅱ 10:30～12:00	日本語集中(朝倉) 日本語総合(朝倉) 日本語総合(朝倉) 日本語総合(物部) 日本語総合(物部) 日本語総合(岡豊) 共通教育	中級作文(尾中)	初中級会話Ⅰ(大塚) 日本語初級Ⅰ(東條) 日本語Ⅰ(林)	高知文化事情(エバ) 基礎日本語(池)	日本語初級Ⅲ(今井) 日本語Ⅰ(林)	コミュニケーション日本語Ⅰ(大塚)
Ⅲ 13:10～14:40	日本語集中(朝倉) 日本語総合(朝倉) 日本語総合(物部) 日本語総合(岡豊) カウンセリング	中級漢字・語彙Ⅰ(尾中)	アカデミック・ライティング(大塚) 日本語初級Ⅰ(東條) エバ	基礎日本語(吉田) 物部(東條)12:00～14:00	中級聴解Ⅰ(石川)	初中級文型(吉田)
Ⅳ 14:50～16:20	日本語集中(朝倉) 日本語総合(朝倉) 日本語総合(物部) 日本語総合(岡豊) 教育学部 オフィスアワー		エバ、林	異文化理解A(林・大塚)	大塚	
Ⅴ 16:30～18:00	日本語集中(朝倉) 日本語総合(朝倉) 日本語総合(物部) 日本語総合(岡豊)		日本語初級・日本事情(今井)		日本語中級(今井)	

＜2019年度第2学期国際連携推進センター日本語総合コース授業時間割＞

2019年度第2学期国際連携推進センター教員（専任・非常勤）担当授業時間割

時限	開講キャンパス等	月(MON)	火(TUE)	水(WED)	木(THU)	金(FRI)
I 8:50～10:20	集中コース(朝倉) 総合コース(朝倉) 総合コース(物部) 共通教育		基礎日本語(林) 初級Ⅱ(神崎)	中級会話Ⅱ(尾中)	中級漢字・語彙Ⅱ(尾中)	
Ⅱ 10:30～12:00	集中コース(朝倉) 総合コース(朝倉) 総合コース(朝倉) 総合コース(物部) 共通教育	中級読解(神崎)	基礎日本語(林) 初級Ⅰ(神崎) 日本語Ⅲ(大塚)	地域文化理解(林・大塚・エバ)	中級聴解Ⅱ(林) 基礎日本語(大塚) 初中級(伊藤)	初中級会話Ⅱ(池) 初級Ⅰ(石川) 日本語Ⅲ(大塚)
Ⅲ 13:10～14:40	集中コース(朝倉) 総合コース(朝倉) 総合コース(物部) 共通教育 カウンセリング	初中級文法(吉田) 日本語Ⅳ(神崎)	コミュニケーション日本語Ⅱ(林) 日本事情(今井) 朝倉(エバ)	物部(東條)12:00～14:00	基礎日本語(大塚) 日本語Ⅳ(神崎) 朝倉(エバ)	初級Ⅱ(石川)
Ⅳ 14:50～16:20	集中コース(朝倉) 総合コース(朝倉) 補講(物部) オフィスアワー(朝倉)	神崎	エバ・林		大塚・エバ	
Ⅴ 16:30～18:00	集中コース(朝倉) 総合コース(朝倉) 総合コース(物部) 総合コース(岡豊)		日本語初級・日本事情(今井)		日本語中級(今井)	

2019年度日本語総合コース
第１学期授業シラバス＜朝倉キャンパス＞

Ⅰ．授業の概要

高知大学朝倉キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。4月第2週から始まり、プレースメントテストを受けた受講生を対象とする。科目名は日本語未習者を対象とする「基礎日本語」、日本語既習者で中級レベル対象の「初中級会話Ⅰ」、「初中級文型」、「中級作文」、「中級漢字･語彙Ⅰ」、「中級会話Ⅰ」、「中級聴解Ⅰ」、「高知文化事情」、中上級レベル対象の「コミュニケーション日本語Ⅰ」、上級レベル対象の「ビジネス日本語」、「アカデミック・ライティング」である。

Ⅱ．授業レベルについて

入門レベルは初めて日本語を学習する学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験N5レベルとする。

中級レベルは、初級修了レベルの学生を対象とし、中級前半から中級後半レベルへの4技能の実力向上を図る。到達目標は日本語能力試験N2レベルとする。

中上級レベルは、日本語能力試験N2レベルの学生を対象とし、上級レベルへの4技能の実力向上を図り、到達目標は日本語能力試験N1レベルとする。

上級レベルは、日本語能力試験N1レベルの学生を対象とし、超上級レベルへの4技能の実力向上を図り、到達目標はビジネス日本語習得レベルとする。

Ⅲ．クラス内容

授業科目	担当講師名	曜日・時限
基礎日本語	池純子 吉田鈴香	水曜日２・３限

授業内容：①ひらがな、カタカナの読み、書き
②動詞のフォームを使った基本的な文型
③生活必須語彙・表現
使用教材：『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』第1課～第13課 スリーエーネットワーク　『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説各国語版』スリーエーネットワーク
評価方法：期末試験、出席、授業態度

授業科目	担当講師名	曜日・時限
初中級会話Ⅰ	大塚薫	火曜日２限

授業目標：留学生が主人公のマンガを通して日本人の季節感、現代日本の家族について理解を深める。また、それぞれの課で話題となっている内容について自国の文化と比較し、グループで話し合い発表の能力を高めることを目標とする。
テキスト：『マンガで学ぶ日本語表現と日本文化』アルク
評価方法：最終発表、出席、課題・受講態度

授業科目	担当講師名	曜日・時限
初中級文型	吉田鈴香	金曜日３限

授業目標：初級レベルの文型を適切に使えるようになることを目標とする。新しい文型を身につけ、中級レベルの日本語学習に進む準備をする。初級文法を復習し、新しい文法を学習していく。短文作成に重点を置く。
テキスト：『できる日本語　わたしの文法ノート 初中級』凡人社
評価方法：出席を含む受講態度、宿題、期末試験

授業科目	担当講師名	曜日・時限
中級作文	尾中美代子	月曜日２限

授業目標：日常生活において必要な「書く」ことの基本を知ると同時に、自分の言いたいことを他者にわかりやすく伝えられる文章の書き方を学ぶ。クラスメートの書いたものについて、互いに評価したり、意見交換をしたりできることを目指す。
テキスト：ハンドアウト
評価方法：小テスト、受講態度、課題、小論文

授業科目	担当講師名	曜日・時限
中級漢字・語彙Ⅰ	尾中美代子	月曜日３限

授業目標：中級レベルにふさわしい語彙力と漢字の認識能力を身につける。
テキスト：『コロケーションが身につく日本語表現練習帳』研究社
評価方法：期末試験、受講態度、課題

授業科目	担当講師名	曜日・時限
中級会話Ⅰ	池純子	水曜日１限

授業目標：グループディスカッションや発表を通して、言いたいことを適切に相手に伝えるための日本語のコミュニケーション能力を育成する。場面に応じた表現を身に付け、自分の言いたいことを、わかりやすく、論理的に説明できるようになることを目標とする。
テキスト：ハンドアウト
評価方法：期末試験、課題・受講態度

授業科目	担当講師名	曜日・時限
中級聴解	石川啓子	木曜日３限

授業目標：やや専門的な解説やスピーチを聞いて、要点を捉えることができるようになる。主にスピーチを聞いて内容を把握する練習をするが、その他に、実際のニュース解説を聞いたり、自然な会話を聞いたりする機会を設ける。
テキスト：『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ聴解［中上級］』
東京外国語大学
評価方法：出席、授業中の活動、提出物、期末試験

授業科目	担当講師名	曜日・時限
コミュニケーション日本語Ⅰ	大塚薫	金曜日２限

授業目標：大学の講義・演習をこなすための日本語能力を習得するとともに、学生生活を送る上で必要なコミュニケーション能力を身に付け、考える力を養い、「スピーチ」、「討論」などの発信型スキルを伸ばすことを目標とする。また、就職活動に必要な日本語力を身につけるために、自己分析・企業研究・面接に必要な日本的マナーや話し言葉の日本語を習得する。

テキスト：『就職のための日本語』多楽園
『伸ばす！就活能力・ビジネス日本語力』国書刊行会

評価方法：最終発表、課題提出、出席・受講態度

授業科目	担当講師名	曜日・時限
高知文化事情	エバ・ガルシア	水曜日２限

授業内容：土佐の伝統文化を体験しながら、自然環境や歴史的背景と文化の関係を考え、総括的に学習し、高知文化への理解を深めることを目標とする。

テキスト：ハンドアウト

評価方法：課題提出・口頭発表、出席・受講態度、最終レポート

授業科目	担当講師名	曜日・時限
ビジネス日本語	林翠芳	火曜日１限

授業目標：ビジネス場面に使われるビジネス日本語の聴解と聴読解を中心に、ビジネス日本語のコミュニケーション・スキルの向上を図り、ビジネス知識、習慣など、社会的・文化的背景を含めた、総合的な理解力や判断力を養うことを目標とする。ビジネス日本語能力テストにも対応した内容構成で学習する。

テキスト：ハンドアウト

評価方法：出席、受講態度・課題提出、期末評価

授業科目	担当講師名	曜日・時限
アカデミック・ライティング	大塚薫	火曜日３限

授業目標：間違えやすい文法や表現の使い方を復習し、論理的な文章を書くための技術を学びつつ、レポート・論文等複雑な内容や専門的なテーマの文章の書き方を習得することを目標とする。

テキスト：『留学生のためのここが大切 文章表現のルール』スリーエーネットワーク

評価方法：最終発表、課題提出、出席・受講態度

2019 年度日本語総合コース
第 1 学期授業シラバス＜岡豊キャンパス＞

Ⅰ．授業の概要

高知大学岡豊キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。「日本語初級・日本事情」、「日本語中級」を週 1 コマずつ設け、2019 年 4 月第 2 週から 7 月まで 15 週間開講する。

Ⅱ．授業レベルについて

「日本語初級・日本事情」は、初級レベルの学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。原則として留学生がいつ参加しても授業に主体性をもってかかわれる内容とする。
「日本語中級」は、初級修了レベルの学生を対象とし、初級後半から中級前半レベルへの 4 技能の向上を図る。到達目標は日本語能力試験 N3 レベルとする。

Ⅲ．クラス内容

授業科目	担当講師名	曜日・時限
日本語初級・日本事情	今井多衣子	火曜日 5 限

授業内容：初級レベルの日本語を使って日本人の生活や日本の文化を学ぶ
使用教材：『みんなの日本語初級Ⅰ』スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク
『まるごと　日本のことばと文化』入門　三修社
評価方法：出席、課題、授業態度

授業科目	担当講師名	曜日・時限
日本語中級	今井多衣子	木曜日 5 限

授業内容：仕事、学校、娯楽で出合うような身近な話題について主要な点を理解でき、自分の気持ち、状況、経験などをより豊かに表現できることを目指す。訪問、ことばを学ぶ楽しみ、結婚、なやみ相談、旅行中のトラブルなどを学習する。
使用教材：『まるごと 日本のことばと文化』中級 1　三修社
評価方法：出席、課題、授業態度

2019 年度日本語総合コース
第 1 学期授業シラバス＜物部キャンパス＞

Ⅰ．授業の概要

高知大学物部キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。4 月第 2 週から始まり、日本語未習者を対象とする「初級Ⅰ」、日本語初級入門を習得している学習者を対象とする「初級Ⅱ」を週 2 コマずつ設ける。また、日本語既習者で日本語初級前半を習得した学生を対象とした「初級Ⅲ」を週 1 コマ開講する。

Ⅱ．授業レベルについて

「初級Ⅰ」は初めて日本語を学習する学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験 N5 レベルとする。

「初級Ⅱ」は日本語入門を習得している学生を対象とし、「初級Ⅲ」は日本語初級前半を習得している学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験 N4 レベルとする。

Ⅲ．クラス内容

授業科目	担当講師名	曜日・時限
初級Ⅰ	東條美紀(火) 伊藤里奈(木)	火・木曜日 2 限

授業内容：①ひらがな、カタカナの読み、書き
②動詞のフォームを使った基本的な文型
③生活必須語彙・表現

使用教材：『みんなの日本語初級Ⅰ本冊 第 1 課～第 13 課』スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク

評価方法：期末試験、課題・受講態度、出席

授業科目	担当講師名	曜日・時限
初級Ⅱ	東條美紀(火) 伊藤里奈(木)	火・木曜日 1 限

授業内容：初級前半の学習半ばの学習者に対し、継続して初級の日本語学習を行う。初級の基本的な文型、文法項目の学習により、日常生活に必要最低限の会話力の養成を目指す。

使用教材：『みんなの日本語初級Ⅰ本冊 第 14 課～第 25 課』スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク

評価方法：期末試験、課題・受講態度、出席

授業科目	担当講師名	曜日・時限
初級Ⅲ	今井　多衣子	木曜日 2 限

授業内容：初級前半の学習半ばの学習者に対し、継続して初級の日本語学習を行う。初級

の基本的な文型、文法項目の学習により、日常生活に必要最低限の会話力の養成を目指す。

使用教材：『みんなの日本語初級Ⅰ本冊 第20課～第25課』スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク

評価方法：期末試験、課題・受講態度、出席

2019年度日本語総合コース
第2学期授業シラバス＜朝倉キャンパス＞

Ⅰ．授業の概要

高知大学朝倉キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。10 月第1週から始まり、プレースメントテストを受けた受講生を対象とする。日本語未習者を対象とする「基礎日本語」、日本語既習者で中級レベルの学生を対象とした「初中級文法」、「初中級会話Ⅱ」、「中級読解」、「中級聴解Ⅱ」、「中級会話Ⅱ」、「中級漢字・語彙Ⅱ」、中上級レベルの学生を対象とする「コミュニケーション日本語Ⅱ」を設ける。

Ⅱ．授業レベルについて

入門レベルは初めて日本語を学習する学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験 N5 レベルとする。

中級レベルは、初級修了レベルの学生を対象とし、初級後半から中級前半レベルへの 4 技能の実力アップを図る。到達目標は日本語能力試験 N2 レベルとする。

中上級レベルは、日本語能力試験 N2 レベルの学生を対象とし、上級レベルへの 4 技能の実力アップを図り、到達目標は日本語能力試験 N1 レベルとする。

Ⅲ．クラス内容

授業科目	担当講師名	曜日・時限
基礎日本語	林翠芳(火) 大塚薫(木)	火曜日 1・2 限 木曜日 2・3 限

授業内容：①ひらがな、カタカナの読み、書き
②動詞のフォームを使った基本的な文型
③生活必須語彙・表現
使用教材：『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』第1課～第25課 スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説各国語版』スリーエーネットワーク
評価方法：期末試験、出席、授業態度

授業科目	担当講師名	曜日・時限
初中級文法	吉田鈴香	月曜日 3 限

授業内容：初級レベルの文型を適切に使えるようになる。新しい文型を身につけ、中級レベルの日本語学習に進む準備をする。日本人や日本社会について書かれた文章を読みながら、初級文法を復習し、新しい文法を学習していく。短文作成に重点を置く。
使用教材：『中級日本語教科書 わたしの見つけた日本』東京大学出版会
評価方法：出席を含む受講態度、宿題、期末試験

授業科目	担当講師名	曜日・時限
初中級会話Ⅱ	池純子	金曜日 2 限

授業内容：場面に応じた語彙や表現を学び、それを使って適切な会話ができるようになる

ことを目標とする。
使用教材：『まるごと　日本のことばと文化　初中級』三修社
評価方法：期末試験（会話と筆記）、課題・受講態度

授業科目	担当講師名	曜日・時限
中級読解	神崎道太郎	月曜日２限

授業内容：中級レベルの学習者を対象とし、文章全体の構造を考えながら分析的に読む練習を行い、読む能力と語彙力の養成を目指す。
テキスト：ハンドアウト
評価方法：課題・受講態度及び出席

授業科目	担当講師名	曜日・時限
中級聴解Ⅱ	林翠芳	火曜日３限

授業内容：会話場面におけるリスニング能力を高め、場面に応じて適切に話す能力を付けることを目標とする。
使用教材：『聞いて覚える話し方　日本語生中継』中～上級編　くろしお出版
評価方法：期末試験（発表）、出席、課題・受講態度

授業科目	担当講師名	曜日・時限
中級会話Ⅱ	尾中美代子	水曜日１限

授業内容：日常の様々なトピックについて、自分の考えを発言したり、他の人の意見を聞いて、発表したりすることができる。毎回、川柳や日常生活で気になる標語などを取り上げ、その文に込められた意味や感情などについて、自分の考えを発表したり、日本人に質問したり、グループで意見交換をしたりする。
テキスト：ハンドアウト
評価方法：期末試験、課題・受講態度

授業科目	担当講師名	曜日・時限
中級漢字・語彙Ⅱ	尾中美代子	木曜日１限

授業内容：中級レベルにふさわしい語彙力と漢字の認識能力を身につける。日常生活でよく使う話題に関する語彙を中心に学習する。
テキスト：『コロケーションが身につく日本語表現練習帳』研究社
評価方法：期末試験、受講態度、宿題

授業科目	担当講師名	曜日・時限
コミュニケーション日本語Ⅱ	林翠芳	木曜日２限

授業内容：大学の講義・演習をこなすための日本語能力を習得するとともに、学生生活を送る上で必要なコミュニケーション能力を身に付け、考える力を養い、「スピーチ」、「討論」などの発信型スキルを伸ばすことを目標とする。

テキスト：『大学で学ぶためのアカデミック・ジャパニーズ』The Japan Times
『大学で学ぶための日本語ライティング』The Japan Times
評価方法：最終発表、課題提出、出席・受講態度

2019 年度日本語総合コース
第 2 学期授業シラバス＜岡豊キャンパス＞

Ⅰ．授業の概要

高知大学岡豊キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。「日本語初級・日本事情」、「日本語中級」を週 1 コマずつ設け、2019 年 10 月第 1 週から 2020 年 2 月まで 15 週間開講する。

Ⅱ．授業レベルについて

「日本語初級・日本事情」は、初級レベルの学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。原則として留学生がいつ参加しても授業に主体性をもってかかわれる内容とする。

「日本語中級」は、初級修了レベルの学生を対象とし、初級後半から中級前半レベルへの 4 技能の向上を図る。到達目標は日本語能力試験 N3 レベルとする。

Ⅲ．クラス内容

授業科目	担当講師名	曜日・時限
日本語初級・日本事情	今井多衣子	火曜日 5 限

授業内容：初級レベルの日本語を使って日本人の生活や日本の文化を学ぶ。高知へ初来日の学生のために高知市へ一人で行けるようにする。
使用教材：『みんなの日本語初級Ⅰ』スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク
『まるごと　日本のことばと文化』入門　三修社
評価方法：　出席、課題、授業態度

授業科目	担当講師名	曜日・時限
日本語中級	神崎道太郎	木曜日 5 限

授業内容：仕事、学校、娯楽で出合うような身近な話題について主要な点を理解でき自分の気持ち、状況、経験などをより豊かに表現できることを目指す。「なやみ相談」、「旅行中のトラブル」、「仕事をさがす」、「はじめての人と」、「おすすめの料理」、「私の好きな音楽」などを学習する。
使用教材：『まるごと 日本のことばと文化』初中級 1　三修社
『まるごと 日本のことばと文化』中級 1　三修社
評価方法：　出席、課題、授業態度

2019 年度日本語総合コース
第 2 学期授業シラバス＜物部キャンパス＞

Ⅰ．授業の概要

高知大学物部キャンパスに在籍する全留学生を対象とした日本語コースである。10 月第 1 週から始まり、日本語未習者を対象とする「初級Ⅰ」、日本語入門を習得した学習者を対象とする「初級Ⅱ」、日本語初級前半を習得している学習者を対象とする「初中級」、2019 年に来日した学生を対象とする「日本事情」を設ける。「初級Ⅰ」、「初級Ⅱ」は週 2 コマ、「初中級」、「日本事情」は週 1 コマである。

Ⅱ．授業レベルについて

「初級Ⅰ」は初めて日本語を学習する学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験 N5 レベルとする。

「初級Ⅱ」は日本語入門を習得している学生を、「初中級」は日本語初級前半を習得している学生を対象とし、日本語学習にあたって必要な基本的知識の習得と、日常生活に最低限必要なコミュニケーション能力の習得を目指す。到達目標は日本語能力試験 N4 レベルとする。

「日本事情」は、日本の生活に慣れていない学生を対象とし、高知県での生活環境に慣れ、今後生活していく上での様々な情報を習得し、地域の人々とも円満な関係を築けるようになることを目指す。

Ⅲ．クラス内容

授業科目	担当講師名	曜日・時限
初級Ⅰ	今井多衣子(火) 石川啓子(金)	火・金曜日 2 限

授業内容：①ひらがな、カタカナの読み、書き
②動詞のフォームを使った基本的な文型
③生活必須語彙・表現

使用教材：『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』第 1 課～第 13 課　スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク
『かな入門』

評価方法：　期末試験、小テスト・受講態度、出席

授業科目	担当講師名	曜日・時限
初級Ⅱ	神崎道太郎(火) 石川啓子(金)	火曜日 1 限 金曜日 3 限

授業内容：初級前半の学習半ばの学習者に対し、引き続き初級の日本語学習を行う。初級前半の基本的な文型・文法項目の学習により、日常生活に必要最低限の会話力の養成を目指す。

使用教材：『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』第 14 課～第 25 課 スリーエーネットワー
『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク

評価方法：期末試験、課題・受講態度、出席

授業科目	担当講師名	曜日・時限
初中級	伊藤里奈	木曜日 2 限

授業内容：初級前半を学習した学習者に対し、引き続き日本語学習を行う。初級前半から後半にかけての基本的な文型・文法項目の学習により、日常生活に必要最低限の会話力の養成を目指す。日常的な日本語表現を聴き取り、適切な会話やスピーチができるようになる。

使用教材：『みんなの日本語初級Ⅱ本冊』第 31 課～第 43 課 スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級Ⅱ翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク

評価方法：期末試験、課題・受講態度、出席

授業科目	担当講師名	曜日・時限
日本事情	今井多衣子	火曜日 3 限

授業内容：高知県及び高知市、南国市での生活環境に慣れ、印象深い日本文化体験をする。

①オリエンテーション、自己紹介
②高知市へ行き、My-Yu バスに乗り観光地巡り
③大学一日公開日の準備
④大学一日公開日「日本語カフェ」での日本語実習
⑤南国市の生活ガイド及び災害に関する情報学習
⑥日本の年間伝統行事と年賀状
⑦日本の正月体験
⑧日本事情の感想と各国事情との比較

使用教材：独自教材（ハンドアウト）

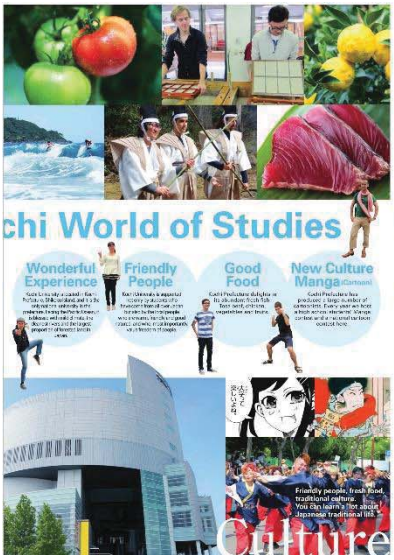
評価方法：課題、受講態度、出席

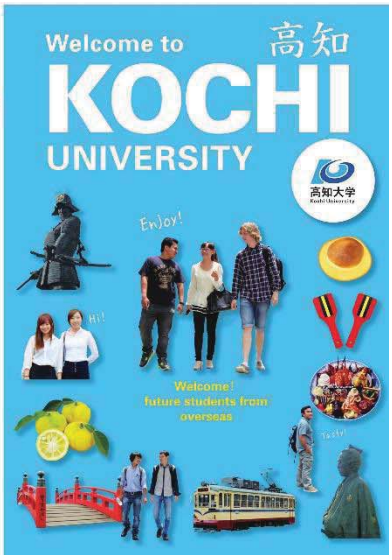
6. 出版・刊行物等

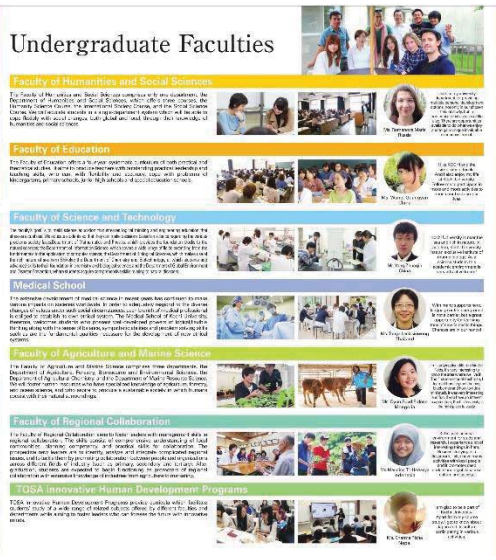
（http://www.kochi-u.ac.jp/international/brochure/）

高知大学英文広報誌

Welcome to Kochi University







Annual Bulletin（英語） 2018-2019

University Topics

President Katsutoshi Sakurai delivers keynote address at USR Expo 2018 in Taiwan

At the University Social Responsibility Expo in Taiwan at the National Taiwan University on July 28 and 29, Kochi University president Katsutoshi Sakurai delivered the keynote address discussing his "super-regional university" vision.
The University Social Responsibility Expo, Taiwan's largest event dedicated to promoting regional collaboration between universities, is a joint initiative of the University Social Responsibility Center, the National Cheng Kung University and the National Taiwan University, under the auspices of the Taiwan Ministry of Education. Sakurai was invited by the Taiwan Ministry of Education to deliver the keynote address on the theme of promoting university collaboration at the regional level.
In the keynote address, with the title The Regional Collaboration Towards "Super Regional University", Sakurai spoke of the role of universities in promoting innovation and creativity at the regional level, and described specific Kochi University initiatives such as Tosa FBC, University COC and the COC+ project.

Kochi University President Katsutoshi Sakurai (left) after the keynote address

◀Meeting representatives of participating universities

Four students from the Kendo club to represent the Chugoku-Shikoku region at the national student kendo championships

The combined 65th Chu-Shikoku Student Kendo Championships and 50th Chu-Shikoku Women's Student Kendo Championships were staged by the Chu-Shikoku University Kendo Federation at the Ehime Budokan in Ehime prefecture on May 20. Four students from the Kochi University kendo club, three male and one female, were chosen to represent the region at the upcoming national student kendo championships, the pinnacle competition for university-level kendo enthusiasts, which will be held on July 7 and 8 at Nihon Budokan in Tokyo.
The tournament-style championships for the Chu-Shikoku region consist of one-on-one contests between 256 men and 128 women selected from 35 male and 33 female universities in the Federation, and effectively serve as qualifiers for the national championships. After a series of excellent contests, just 16 men and ten women won through to the national championships.
This is the first time the Kochi University Kendo Club has had four students at the national championships. The victorious students were (in the male category) Takuma Taniguchi (third year), Kazutoshi Kuroiwa (third year), Kaninari Tokizawa (first year), and (in the female category) Riho Miura (second year). Interestingly, all are currently studying at the Faculty of Education.

Happiest memories of Student Exchanges

Cecilie Nyhus Johansen
Norway
Inland Norway University of Applied Sciences

The summer course was a great opportunity to learn about Japanese culture and language. It was my first time in Japan and I'm so grateful I got to experience Kochi. Through the summer course I got to see some wonderful attractions; such as a cove, a botanical garden and temples. We also got to visit a primary school. I fell in love with the food and admired the kindness that the locals showed. I met new people and got some new friends, who also taught me some important Japanese phrases and customs. I got to experience the typhoon, the sun and a lot of humidity – all in one week. I left Japan wishing I could have seen more, and with a determination to come back. Arigatou gozaimasu.

Katsuho Kori
Faculty of Humanities and Social Sciences, Kochi University, Second-Year Student

I studied at Inland Norway University of Applied Sciences for six months. As part of the English course I studied English and American Literature and Culture as well as English language. I also did some classes in Norwegian. It was a heavy workload; I had to do preparation before class and revision afterwards, not to mention group work and discussion during class. But I gradually got used to it, and had some great times staying up late talking with other students.
There is an enormous difference in daylight hours between summer and winter in northern Europe. Time seems to pass more slowly, and people are much more laid-back. I was lucky to experience a culture and way of life that is totally different to ours in Japan. Northern Europeans are very friendly and everyone was really supportive. Studying overseas has not only contributed to my education, it's been a learning experience for me personally.

高知大学 Kochi University
2-5-1 Akebono-cho, Kochi City, Kochi, 780-8520 Japan
E-mail : kikakukh@kochi-u.ac.jp
URL : http://www.kochi-u.ac.jp/english/index.html

Asakura Campus
Faculty of Humanities and Social Sciences, Faculty of Education
Faculty of Science and Technology, Faculty of Regional Collaboration
TOSA Innovative Human Development Programs
2-5-1 Akebono-cho,Kochi City, Kochi, 780-8520 Japan

Oko Campus
Medical School,
Medical School Hospital
Kohasu Oko-cho,Nankoku City, Kochi, 783-8505 Japan

Monobe Campus
Faculty of Agriculture and Marine Science
200 Monobe Otsu,Nankoku City, Kochi 783-8502 Japan

Kochi University
Annual Bulletin 2018 - 2019

高知大学 Kochi University

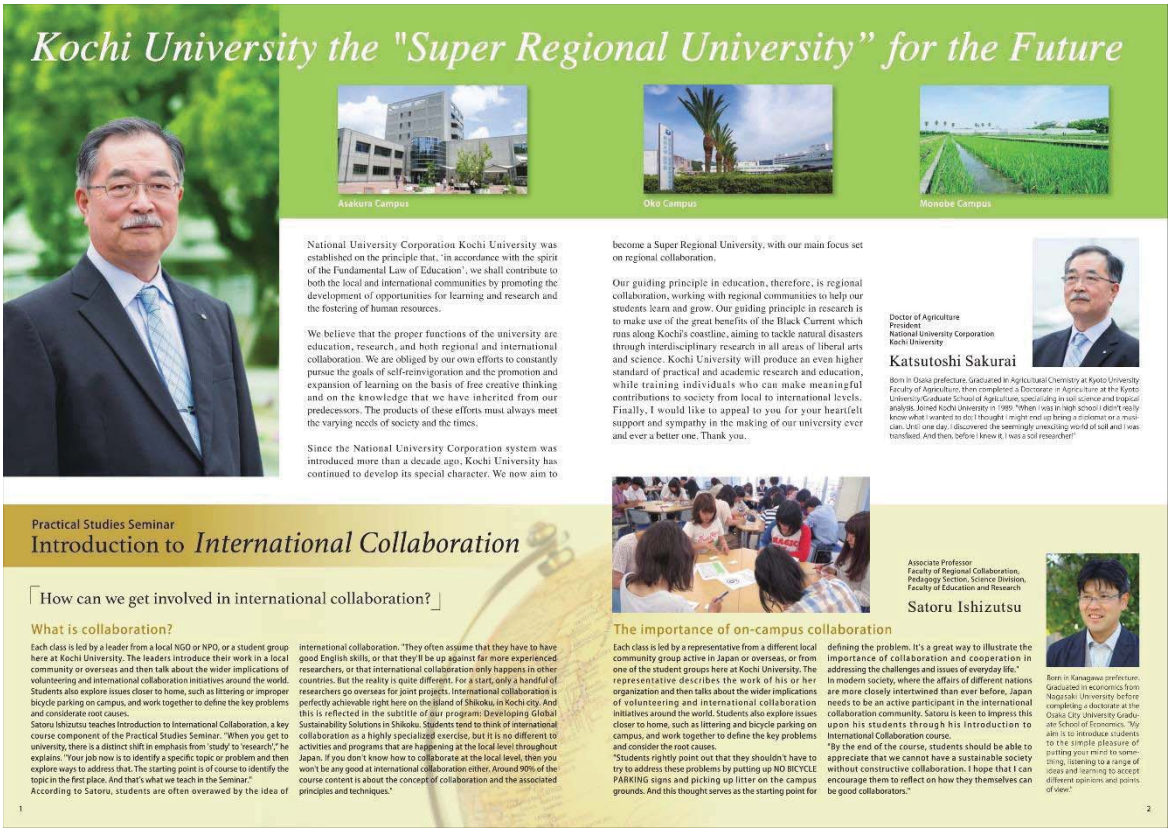
2-5-1 Akebono-cho, Kochi City, Kochi, 780-8520 Japan

CONTENTS

Kochi University the "Super-Regional" University of the future 1
Introduction to International Collaboration
The mystery of red tides and ocean viruses 3
ICommon first-year subject Introduction to Yosakoi 5
Wood Chemistry Lab All-new functional paper 6
University Topics 7

Professor Nagasaki and senior researcher Akihito Takano monitor images of virus-infected cells with an advanced scanning electron microscope (SEM)

Yosakoi



Kochi University the "Super Regional University" for the future

Asakura Campus

Oko Campus

Monobe Campus

National University Corporation Kochi University was established on the principle that, 'in accordance with the spirit of the Fundamental Law of Education', we shall contribute to both the local and international communities by promoting the development of opportunities for learning and research and the fostering of human resources.

We believe that the proper functions of the university are education, research, and both regional and international collaboration. We are obliged by our own efforts to constantly pursue the goals of self-reinvigoration and the promotion and expansion of learning on the basis of free creative thinking and on the knowledge that we have inherited from our predecessors. The products of these efforts must always meet the varying needs of society and the times.

Since the National University Corporation system was introduced more than a decade ago, Kochi University has continued to develop its special character. We now aim to become a Super Regional University, with our main focus set on regional collaboration.

Our guiding principle in education, therefore, is regional collaboration, working with regional communities to help our students learn and grow. Our guiding principle in research is to make use of the great benefits of the Black Current which runs along Kochi's coastline, aiming to tackle natural disasters through interdisciplinary research in all areas of liberal arts and science. Kochi University will produce an even higher standard of practical and academic research and education, while training individuals who can make meaningful contributions to society from local to international levels. Finally, I would like to appeal to you for your heartfelt support and sympathy in the making of our university ever and ever a better one. Thank you.

Doctor of Agriculture
President
National University Corporation
Kochi University

Katsutoshi Sakurai

Born in Osaka prefecture. Graduated in Agricultural Chemistry at Kyoto University Faculty of Agriculture, then completed a Doctorate in Agriculture at the Kyoto University Graduate School of Agriculture, specializing in soil science and tropical analysis. Joined Kochi University in 1989. "When I was in high school I didn't really know what I wanted to do; I thought I might end up being a dickensit or a musician. Until one day, I discovered the seemingly unexciting world of soil and I was transfixed. And then, before I knew it, I was a soil researcher!"

Practical Studies Seminar
Introduction to International Collaboration

「How can we get involved in international collaboration?」

What is collaboration?

Each class is led by a leader from a local NGO or NPO, or a student group here at Kochi University. The leaders introduce their work in a local community or overseas and then talk about the wider implications of volunteering and international collaboration initiatives around the world. Students also explore issues closer to home, such as littering or improper bicycle parking on campus, and work together to define the key problems and considerate root causes.
Satoru Ishizutsu teaches Introduction to International Collaboration, a key course component of the Practical Studies Seminar. "When you get to university, there is a distinct shift in emphasis from 'study' to 'research'," he explains. "Your job now is to identify a specific topic or problem and then explore ways to address that. The starting point is of course to identify the topic in the first place. And that's what we teach in the Seminar."
According to Satoru, students are often overawed by the idea of international collaboration. "They often assume that they have to have good English skills, or that they'll be up against far more experienced researchers, or that international collaboration only happens in other countries. But the reality is quite different. For a start, only a handful of researchers go overseas for joint projects. International collaboration is perfectly achievable right here on the island of Shikoku, in Kochi city. And this is reflected in the subtitle of our program: Developing Global Sustainability Solutions in Shikoku. Students tend to think of international collaboration as a highly specialized exercise, but it is no different to activities and programs that are happening at the local level throughout Japan. If you don't know how to collaborate at the local level, then you won't be any good at international collaboration either. Around 90% of the course content is about the concept of collaboration and the associated principles and techniques."

The importance of on-campus collaboration

Each class is led by a representative from a different local community group active in Japan or overseas, or from one of the student groups here at Kochi University. The representative describes the work of his or her organization and then talks about the wider implications of volunteering and international collaboration initiatives around the world. Students also explore issues closer to home, such as littering and bicycle parking on campus, and work together to define the key problems and consider the root causes.
"Students rightly point out that they shouldn't have to try to address these problems by putting up NO BICYCLE PARKING signs and picking up litter on the campus grounds. And this thought serves as the starting point for defining the problem. It's a great way to illustrate the importance of collaboration and cooperation in addressing the challenges and issues of everyday life."
In modern society, where the affairs of different nations are more closely intertwined than ever before, Japan needs to be an active participant in the international collaboration community. Satoru is keen to impress this upon his students through his Introduction to International Collaboration course.
"By the end of the course, students should be able to appreciate that we cannot have a sustainable society without constructive collaboration. I hope that I can encourage them to reflect on how they themselves can be good collaborators."

Associate Professor
Faculty of Regional Collaboration,
Pedagogy Section, Science Division,
Faculty of Education and Research

Satoru Ishizutsu

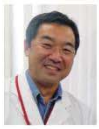
Born in Kanagawa prefecture. Graduated in economics from Nagasaki University before completing a doctorate at the Osaka City University Graduate School of Economics. "My aim is to introduce students to the simple pleasure of putting your mind to something, listening to a range of ideas and learning to accept different opinions and points of view."

1 2

The Mystery of Red Tides and Ocean Viruses

The new frontier of **Neovirology**

Kochi University is
part of a major national research project
exploring the newly emerging academic discipline of neovirology.
Professor Keizo Nagasaki heads the research team on ocean viruses,
which is one of the target research topics.
We spoke to him about the connection between red tides and viruses.



Professor
Science and Technology Department,
Natural Sciences Cluster, Faculty of Education and Research

Keizo Nagasaki

Born in Okayama. Received doctorate in agriculture from Kyoto University Faculty of Agriculture. Worked on research into red tides and viruses at the Japan Fisheries Agency Nankai Marine Research Station. Was then moved into a management role but quit soon after to return to his true calling of research, taking up a post at Kochi University. Lists interests and hobbies as tide pools, highballs, Showa retro, arpeggios and drop shots.

A single spoonful of seawater contains hundreds of millions of viruses

A spoonful of water from the ocean may not appear to harbor any obvious life forms. But take a closer look with an electron microscope and what do you see?

"A single milliliter of water taken from a bay area can have anything between ten million and hundreds of millions of viruses held in suspension," notes Professor Keizo Nagasaki, who teaches the Marine Life Sciences program at the Faculty of Agriculture and Marine Sciences. "The oceans of the world are estimated to hold something like 10^{30} viruses. This is a staggering number, beyond our comprehension really. And only a miniscule fraction of them are actually known to us."

Nagasaki has spent over 25 years studying the role and significance of marine viruses.

Microorganisms such as bacteria propagate by absorbing nutrients from their surroundings and dividing themselves. Viruses, however, cannot propagate on their own; instead they insert their biological instructions into a suitable host and trick the host cells into producing replicas of the virus. This is how diseases such as influenza and the common cold replicate in the human body.

"We tend to think of viruses as malicious actors, things that cause disease," explains Nagasaki. "Indeed, most virology research to date has focused on correlations with disease and illness. But it turns out that the vast majority of viruses do not impact on humans and have no relation to disease whatsoever. In recent years the main focus of virology research has shifted towards viruses that are unrelated to disease."

2016 saw the launch of a new national research project on neovirology. This involves researchers from all over Japan pursuing a variety of studies looking at the importance of viruses to the global ecosystem and their role in relation to the biogenic activity of organisms and ecosystems. Professor Nagasaki heads a consortium of organizations conducting a joint study of marine viruses that includes Kochi University, Kyoto University, Saga University, the Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology (JAMSTEC) and the Japan Fisheries Research and Education Agency (FRA).

Viruses in red tide plankton

Before joining Kochi University in 2016, Nagasaki was working at the Fisheries Research Agency (FRA), studying viruses that can be used to kill off the plankton associated with red tides. Red tides, which are extremely damaging, occur when plankton numbers increase to such an extent that the water appears to change color. There are many species of plankton associated with red tides.

It was back in 1992, while studying red tide plankton in the Seto Inland Sea with a research institute in nearby Hiroshima, that Nagasaki first discovered that viruses could infect plankton. "The world of viruses is full of mystery," he explains, "but also staggeringly beautiful. I was truly taken aback at the discovery."

Soon after, Nagasaki presented his findings to the Japanese Society of Fisheries Science (JSFS). He explained how the viruses enter plankton cells and start propagating exponentially, and showed a number of electron microscope images. This was the first time that many of his audience had seen such images, and the auditorium was abuzz with excitement. After the presentation, the chairperson, clearly impressed by the presentation, invited everyone to stay on for an impromptu discussion of his research findings.

"I was so excited, I had shivers running down my spine," recalls Nagasaki. "I had no idea how wonderful it feels when people take an interest in your research. That moment will live with me forever." His words illustrate the enthusiasm and commitment of the dedicated scientist.

Does the virus completely destroy the host?

Since identifying the all-important link between red tide plankton and viruses, Nagasaki has devoted himself whole-heartedly to research in this field.

"Children who love collecting insects are more than happy to go out in the middle of the hottest summer to see what they can find. I'm the same: I love going out with my team on a mission to find new viruses. And we have to be quick because you only have about two or three days before the virus kills off the host. It's a challenge, but that's part of what makes it so enjoyable."

Nagasaki published a string of papers on the topic to an eager global audience, and soon he and his team became known as the Algal Virus Hunters.

Another key discovery was that the virus does not completely destroy the host plankton as first thought. When a plankton becomes infected, 997 of every 1,000 new cells produced via cell division actually die off; the remaining three form a barrier to fight off the virus, before steadily increasing in number.

"You would assume that the virus and the host would be natural adversaries, but it turns out that they have a more accommodating sort of relationship than that, possibly even allowing the existence of each other to an extent. One of the fascinating parts of virology, something that we don't really understand well at present, is the mechanism by which the virus and host can co-exist."

Uranouchi Bay - Mecca for the red tide research community

Since joining Kochi University, Professor Nagasaki has spent a great deal of his time working at the University's marine biology field station at Uranouchi Bay.

"Uranouchi Bay is a fascinating hunting ground for researchers looking at the phenomenon of red tides. Although the bay area is quite small, every year it has multiple red tide events. Many in the research community are thinking that it might have something to do with a new species of plankton that was discovered a while back that kills off bivalves."

The research team generally collects red tide plankton samples by going out into the bay. An outboard engine typically produces a wake of white foam, except when travelling through a red tide, where the wake is full of brown bubbles. When the team spots the brown bubbles, they stop the boat and start collecting samples using buckets, hoses and plankton nets. This year they also plan to start collecting plankton samples from airborne drones.

Nagasaki is happy to extol the virtues of the marine virus research facilities at Kochi University. "The field station is very close to the university campus, so it's the ideal research set-up for us."

And while relatively few universities in Japan are researching viruses in seawater and fresh water, Kochi University last year installed a brand new next-generation sequencer for high-speed genetic base sequence analysis. The University now boasts a convenient and well-equipped field station together with cutting-edge analysis tools in the lab.

"If you join our team, you'll get to meet a veritable plethora of new viruses," says Nagasaki. "There are still so many questions to be answered in the mysterious world of marine viruses. It's an exciting and challenging field, and we're always looking for fresh new talent to be part of our team."

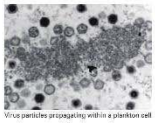
There's every possibility that the red tides of Uranouchi Bay could yield the next great discovery to rock the research community.

The Neovirology Marine Virus research team at Katsurahama beach

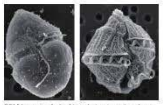
Professor Nagasaki and senior researcher Akihito Takano monitor images of virus infected cells with an advanced scanning electron microscope (SEM)

Mentoring program

Mentoring program



Virus particles propagating within a plankton cell



SEM images of plankton that act as virus hosts

Waterproof drone for collecting red tide samples

New subject to Kochi University

Introduction to YOSAKOI

Common first-year subject: Introduction to Yosakoi

Comprehensive study of Yosakoi

The Yosakoi Festival is the highlight of summer in Kochi prefecture, a colorful and energetic event that has attracted an enthusiastic fan base well beyond the prefectural border. Today, the Yosakoi Festival is held in over 200 locations around the country and even outside Japan. The Introduction to Yosakoi subject, introduced just this year, will be taken by Daisuke Kawatake, who boasts a longstanding connection with the Yosakoi tradition, having been part of the push to start up a Yosakoi Soran Festival in Sapporo during his university days.

"Kochi University has more Yosakoi teams than any other university in Japan, but until now there hasn't been any sort of official push to teach the students about the festival - its origins, how it has evolved over the years, and why its popularity has spread far and wide throughout Japan. This course finally addresses this need."

About 170 students took the course this year; about a third of them had never heard of Yosakoi before. So the course curriculum began with the very basic question: what is the Yosakoi Festival?

"Although it was designed as an introductory subject, we were surprised at the level of interest from third and fourth year students," explains Kawatake. "Quite a few of them had been in the Yosakoi Festival in previous years but wanted to know more about it. I guess it must be a topic of interest to students."

In additional to learning about the origins of Yosakoi, students watch videos of the festival and even practice using the distinctive clappers that are a key part of the festivities.

"Even students who were born and raised right here in Kochi prefecture will tell me afterwards that they learned so many things they never knew about the festival," says Kawatake, "such as how it was created during the grim postwar period as way to stimulate economic growth. Every class has a report presentation where the students are bound to learn something new."

How can students contribute to Yosakoi?

The Introduction to Yosakoi course had a number of guest presenters, including a representative from a very special group that provides support to people who relocate to Kochi after hearing about Yosakoi, and another person who works to promote the unique Seicho Yosakoi Naruko-odori dance that has been used since the very first Yosakoi Festival. "Hearing from people involved at the grassroots level really brings the course to life I think, and illustrates all the challenges, the triumphs and the joys associated with the Yosakoi Festival," says Kawatake.

Next year the course will feature more guest presenters discussing the music and costumes of Yosakoi, as well as sponsors and supporters from local industry.

"Learning about the history, background and unique defining characteristics of the Yosakoi Festival is a great way to introduce students to the idea of in-depth analysis, in this case looking at the dance moves and the meaning behind them. They also gain valuable insights when we study the Yosakoi Soran Festival, for example, and how it was started up by a group of university students who wanted to give back to the local community. We look at the level of commitment from the students and how they worked with the local community to stage the festival at the local sports ground."

Perhaps the Introduction to Yosakoi course will inspire Kochi University students to start their own versions of the Yosakoi Festival. This very special educational initiative is something that is unique to Kochi University.

Center for Regional Sustainability and Innovation (CeRSI)

Daisuke Kawatake

Born in Kochi prefecture. Graduated in cultural anthropology from the University of Tokyo. College of Arts and Sciences. Joined Asahi Shimbun newspaper and served as a local councilor in the city of Tsu before returning to Kochi and serving in a number of roles including special secretary to the Governor of Kochi, administrative assistant at the city of Aki and managing director of the Kochi Association of Small Business Owners. Has been at Kochi University since 2016. "I love that the entire university shuts down on August 9 when the Yosakoi Festival gets underway so that everyone, students and teachers alike, can join in the fun."

Labo Report Wood Chemistry Lab

Can you tell me about the work you do at the Wood Chemistry Lab?

Ichiura: We're not interested in actual wood but in the key chemical component of wood, called cellulose, as well as one of the most well-known cellulose products: paper. Paper has traditionally three main purposes, denoted by the three Ws: writing (i.e., printing paper), wiping (such as tissue paper) and wrapping (wrapping paper). The Wood Chemistry Lab is exploring other potential value-added uses of paper; what we call functional paper.

What types of functional paper are you developing?

Ichiura: We are trying to make paper that you can use when it's wet. Paper normally falls apart in water but we've found that if you add enough wet strength agent for improvement of paper strength in wet, the kind that's already found in ordinary tissue paper, it becomes quite usable. However the problem is that the wet strength agent contains chorine-based chemicals that are harmful to the environment. So now we're going back to the paper production process to see if there are modifications we could make to improve the functionality of the finished product. We're thinking that an activated carbon or photocatalyst additive might have lower environmental impacts.

Research that produces real-world results. That's one of our key aims!

Associate Professor
Agriculture Section,
Natural Sciences Division,
Faculty of Education and Research
Hideaki Ichiura

All-new functional paper

What is value-added functional paper?

Are there any other universities working on functional paper?

Ichiura: There aren't many in Japan doing research like ours, no. So when you join the Wood Chemistry Lab, you know you'll be involved in cutting-edge research. And that the work you do will one day be transformed into useful everyday products that benefit us all. We are already working on a number of tie-ups with local paper manufacturers and major diaper suppliers in Kochi prefecture.

Yoshihito, what inspired you to join the Wood Chemistry Lab?

Yamamoto: I grew up in Kochi prefecture surrounded by forests, so the forestry science program at Kochi University was a natural choice, really. Although I didn't have any particular interest in paper at first, I was inspired to learn more about it after hearing Professor Ichiura's lectures on advanced biomass applications.

And what research are you doing at the moment?

Yamamoto: We're working on waterproof paper, as the professor said. We soak sheets of paper in a phosphorylation reagent that is perfectly safe and has minimal environmental impact, to improve the water resistance properties. We study different concentrations of the reagent, then once we find the optimum concentration, we look at the combination of temperature and soak time that produces maximum strength and rigidity. If the paper sheets can be agitated in water without disintegrating or coming apart, then we're happy.

It's so great when your carefully designed experiment delivers the results you were expecting!

Student
4th year student
(at time of writing)
in Forestry Science program
as part of major in agriculture
at Faculty of Agriculture
Yoshihito Yamamoto

Ichiura: Yoshihito has managed to complete his experiments much faster than I'd expected. He even got to present his findings to local universities from the Chugoku and Shikoku regions at the Japan Wood Research Society conference last September. You often see postgraduate students presenting their final theses at these conferences, but Yoshihito is the first fourth-year student that I'm aware of who has done it.

That's impressive. So the Wood Chemistry Lab opens up opportunities to present your research to academic conferences.

Ichiura: Of course. Yoshihito will be finishing his graduation thesis soon, which means that he should be presenting to the national conference of the Wood Research Society in Kyoto next March. We're hoping that he might even take out the Poster Prize for outstanding presentations but you'll need to fill out your presentation just a bit more, Yoshihito.

Yamamoto: Yes indeed, I'll need to dig a bit deeper into the key topic of the thesis and make sure that I stay on topic.

About the Forestry Science program

Forests promote carbon dioxide circulation and supply nutrients to the oceans. Kochi prefecture boasts an incredible diversity of forest vegetation, from subtropical through to subarctic zones, providing the ideal environment to study the positive impacts of forests and their ecosystems and the principles of good forest care and management, and consider better ways to utilize our finite resources in the modern era.

ISSN　2187－0284

高知大学留学生教育

第13号

『高知大学留学生教育』第13号の刊行に寄せて
―新型コロナウィルス禍と留学―
新納　宏

[特別寄稿]
日本ビジネス文化
鈴木　賞子

[研究論文]
遠隔日本語教育の現況と日本語教育分野への応用
大塚　薫

[研究ノート]
体験学習を通した留学生と日本人学生の国際共修授業
―地域との互恵関係の構築を目指した主体的な学びの場の形成―
林翠芳・大塚薫・ガルシア デル サス エバ

発話文の発音に対する日本人教師とロシア人教師の評価の相違
―文に対する評価と語に対する評価の比較から―
渡辺　裕美

[日本語・日本文化研修留学生修了報告書]
留学生に見る寂しさに関する調査
インタナサック・サラーウット

２０２０年 ３ 月
高知大学 国際連携推進センター

高知大学国際交流 HP

日本語版：
http://www.kochi-u.ac.jp/international/index.html

英語版：
http://www.kochi-u.ac.jp/international/english/index.html

Facebook　（高知大学　国際連携推進センター）
https://www.facebook.com/kochiuniversity.international/

7.会議関連

国際連携推進センター運営戦略室会議名簿

国際連携推進委員会名簿

留学生専門委員会名簿

平成31年4月1日

令和元年度国際連携推進センター運営戦略室会議名簿

◎議　長	新納　　宏	センター長	第2条第1項
委　員	池島　耕	副センター長	第2条第2項
委　員	井上　顕	国際ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ部門長	第2条第3項
委　員	林　　翠芳	国際連携教育部門長	第2条第3項
委　員	渡邊　博善	研究国際部長	第2条第4項
委　員	遠藤　隆俊	副学長（国際連携担当）	第2条第5項

国際連携推進委員会名簿

平成31年4月1日現在

部　局・職　名	氏　　名	任　期	備　　考
副学長（国際連携担当）	遠 藤 隆 俊		
国際連携推進センター長	新 納　　宏		
大学教育創造センター長	小 島 郷 子		
学生総合支援センター長	岩 崎 貢 三		
総合研究センター長	大 西 浩 平		
次世代地域創造センター長	石 塚 悟 史		
国際連携推進センター副センター長	池 島　　耕		
国際連携推進センター国際プロジェクト部門長	井 上　　顕		
国際連携推進センター国際連携教育部門長	林　　翠 芳		
人文社会科学部選出教員	周　雲 喬	2018.4.1～2020.3.31	
教育学部選出教員	長谷川　雅世	2018.4.1～2020.3.31	
理工学部選出教員	梶 芳 浩 二	2018.4.1～2020.3.31	
医学部選出教員	小 林 道 也	2018.4.1～2020.3.31	
農林海洋科学部選出教員	島 崎 一 彦	2018.4.1～2020.3.31	
地域協働学部選出教員	大 槻 知 史	2019.4.1～2021.3.31	
黒潮圏総合科学専攻選出教員	新 保 輝 幸	2018.4.1～2020.3.31	
センター連絡調整会議選出教員(国際連携推進センター長が兼務)	新 納　　宏	2018.4.1～2020.3.31	
土佐さきがけプログラム選出教員	柴 田 雄 介	2018.4.1～2020.3.31	
研究国際部長	渡 邊 博 善		
その他委員長が必要と認めた者			

委員18名（定足数は2分の1以上：9名）

高知大学国際連携推進委員会留学生専門委員会名簿

令和元年4月1日現在

部局・職名		氏名	任期	備考
1	国際連携推進センター長	新納　宏		
2	国際連携推進センター副センター長	池島　耕		
3	国際連携推進センター国際プロジェクト部門長	井上　顕		
4	国際連携推進センター国際連携教育部門長	林　翠芳		
5	国際連携推進センター専任担当教員	神崎　道太郎		
6	国際連携推進センター専任担当教員	林　翠芳		
7	国際連携推進センター専任担当教員	大塚　薫		
8	国際連携推進センター専任担当教員	Eva Garcia del Saz		
9	人文社会科学部選出教員	周　雲喬	H30.4.1～R2.3.31	
10	教育学部選出教員	長谷川雅世	H30.4.1～R2.3.31	
11	理工学部選出教員	福間慶明	H30.4.1～R2.3.31	
12	医学部選出教員	小林道也	H30.4.1～R2.3.31	
13	農林海洋科学部選出教員	島崎一彦	H30.4.1～R2.3.31	
14	地域協働学部選出委員	大槻知史	H30.4.1～R2.3.31	
15	黒潮圏総合科学専攻選出教員	関田諭子	H30.4.1～R2.3.31	
16	土佐さきがけプログラム教員	柴田雄介	H30.4.1～R2.3.31	
17	国際交流室長	門脇英雄		
18	学生支援課長	岡山　司		
その他委員長が必要と認めた者				

委員18名（定足数12名）

8.その他

海外協定校（大学間・部局間協定一覧表）

外国人留学生在籍（国別）

外部資金獲得状況

大学間協定一覧表（平成31年4月1日現在）

No.	相手先機関	国・地域名	締結年月日	協定内容	中心部局
1	ブラビジャヤ大学	インドネシア	2003/2/28	学術交流及び学生交流	人文社会科学部
2	チェンデラワシ大学	インドネシア	2004/9/28	学術交流及び学生交流	医学部
3	ボゴール農業大学	インドネシア	2007/3/1	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
4	スリウィジャヤ大学	インドネシア	2008/3/11	学術交流	農林海洋科学部
5	ハルオレオ大学	インドネシア	2009/12/16	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
6	タンジュンプラ大学	インドネシア	2010/2/1	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
7	リア外国語大学ジャカルタ校	インドネシア	2018/1/2	学術交流及び学生交流	教育学部
8	韓瑞大学校	韓国	2003/7/23	学術交流及び学生交流	人文社会科学部
9	金剛大学校	韓国	2008/12/9	学術交流及び学生交流	人文社会科学部
10	白石大学校	韓国	2010/3/25	学術交流及び学生交流	人文社会科学部
11	明知大学校	韓国	2013/1/3	学術交流及び学生交流	国際連携推進センター
12	国立慶尚大学校	韓国	2013/3/4	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
13	東国大学校	韓国	2013/7/3	学術交流及び学生交流	教育学部
14	コンケン大学	タイ	1997/3/27	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
15	カセサート大学	タイ	2000/5/1	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
16	チェンマイ大学	タイ	2013/2/12	学術交流	農林海洋科学部
17	タマサート大学	タイ	2013/8/20	学術交流及び学生交流	理工学部
18	ラジャマンガラエ科大学	タイ	2018/12/28	学術交流	農林海洋科学部
19	国立中山大学	台湾	2007/5/14	学術交流及び学生交流	黒潮圏総合科学専攻
20	東海大学	台湾	2007/10/18	学術交流及び学生交流	教育学部
21	中国文化大学	台湾	2010/1/20	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
22	国立東華大学	台湾	2013/8/27	学術交流及び学生交流	黒潮圏科学部門
23	揚州大学	中国	1997/3/10	学術交流	農林海洋科学部
24	安徽大学	中国	2002/5/21	学術交流及び学生交流	教育学部
25	陝西科技大学	中国	2003/5/15	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
26	瀋陽薬科大学	中国	2005/5/12	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
27	河南大学	中国	2006/4/10	学術交流及び学生交流	人文社会科学部
28	天津師範大学	中国	2006/12/28	学術交流及び学生交流	教育学部
29	佳木斯大学	中国	2008/3/24	学術交流及び学生交流	医学部
30	南京航空航天大学	中国	2009/11/12	学術交流及び学生交流	理工学部
31	上海海洋大学	中国	2010/10/15	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
32	常州大学	中国	2011/12/19	学術交流及び学生交流	理工学部
33	北京聯合大学	中国	2013/3/11	学術交流及び学生交流	国際連携推進センター
34	北京外国語大学	中国	2013/6/21	学術交流及び学生交流	国際連携推進センター
35	東北大学秦皇島分校	中国	2015/4/15	学術交流及び学生交流	教育学部
36	フィリピン大学	フィリピン	2005/11/24	学術交流及び学生交流	黒潮圏総合科学専攻
37	ビコール大学	フィリピン	2006/3/31	学術交流及び学生交流	黒潮圏科学部門
38	パルティド州立大学	フィリピン	2017/12/18	学術交流及び学生交流	黒潮圏総合科学専攻
39	ハノイ科学大学	ベトナム	2002/7/2	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
40	ハノイ国立教育大学	ベトナム	2006/1/6	学術交流	農林海洋科学部
41	ハノイ科学工業大学	ベトナム	2012/11/1	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
42	タイグエン大学	ベトナム	2015/3/25	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
43	ビン大学	ベトナム	2018/3/29	学術交流	農林海洋科学部
44	マレーシアプトラ大学	マレーシア	2007/5/18	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
45	マレーシアサラワク大学	マレーシア	2009/11/24	学術交流及び学生交流	黒潮圏総合科学専攻
46	アイルランド王立外科医学院バーレーン医科大学	バーレーン	2013/3/21	学術交流及び学生交流	医学部
47	アラビア湾岸諸国立大学	バーレーン	2014/2/13	学術交流	医学部
48	ガーナ大学	ガーナ	2015/9/9	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
49	クイーンズランド大学	オーストラリア	1980/10/1	学術交流及び学生交流	国際連携推進センター
50	カリフォルニア州立大学フレズノ校	アメリカ	2009/10/22	学術交流及び学生交流	国際連携推進センター
51	ロードアイランド大学	アメリカ	2015/6/17	学術交流及び学生交流	土佐さきがけプログラム
52	テキサス大学ダラス校	アメリカ	2016/2/4	学術交流	土佐さきがけプログラム
53	南マットグロッソ連邦大学	ブラジル	2012/3/13	学術交流及び学生交流	医学部
54	国立ポリテクエ科大学 応用研究所，サルティジョ校	メキシコ	2003/9/8	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
55	サルティジョエ科大学	メキシコ	2003/9/9	学術交流及び学生交流	農林海洋科学部
56	サッサリ大学	イタリア	2013/2/21	学術交流及び学生交流	地域協働学部
57	ハンゼ応用科学大学	オランダ	2015/3/9	学術交流及び学生交流	土佐さきがけプログラム
58	イェーテボリ大学	スウェーデン	2006/2/27	学術交流及び学生交流	教育学部
59	南ボヘミア大学	チェコ	1999/6/23	学術交流及び学生交流	教育学部
60	チェコ科学アカデミー生物学センター	チェコ	1999/6/24	学術交流	教育学部
61	インランドノルウェー応用科学大学	ノルウエー	2017/12/22	学術交流及び学生交流	教育学部
62	カザフ国立大学	カザフスタン	2018/2/27	学術交流及び学生交流	医学部

部局間協定一覧表（平成31年4月1日現在）

No.	相手先機関	国・地域名	締結年月日	協定内容	担当部局
1	釜山外国語大学校日本語大学	韓国	2007/3/8	学術交流・学生交流	人文社会科学部
2	高雄大学人文社会科学部	台湾	2016/9/21	学術交流・学生交流	人文社会科学部
3	開南大学	台湾	2016/11/29	学術交流・学生交流	人文社会科学部
4	淡江大学	台湾	2019/3/13	学術交流・学生交流	人文社会科学部
5	天津科技大学経済与管理学院	中国	2008/4/4	学術交流	人文社会科学部
6	北京語言大学	中国	2017/3/9	学術交流・学生交流	人文社会科学部
7	樹人医護管理専科学校	台湾	2018/1/9	学術交流・学生交流	教育学部
8	モンゴル・ロシア共同学校	モンゴル	2012/6/5	学術交流・学生交流	教育学部（附属中学校）
9	スウェーデン王国オィレショー特別学校	スウェーデン	2011/2/15	学術交流	教育学部
10	パレストラ体育スポーツ大学	チェコ	2016/1/26	学術交流・学生交流	教育学部
11	ユニバーシティ・カレッジ・コペンハーゲン	デンマーク	2016/8/15	学術交流・学生交流	教育学部
12	オーフス大学教養学部	デンマーク	2016/9/22	学術交流	教育学部
13	ユバスキュラ大学教育学部	フィンランド	2015/12/10	学術交流・学生交流	教育学部
14	シアクアラ大学	インドネシア	2018/8/27	学術交流	理工学部
15	モナッシュ大学サステナブルケミカルマニュファクチャリングセンター	オーストラリア	2010/8/9	学術交流	理工学部
16	パドバ大学理学部	イタリア	2010/1/20	学術交流	理工学部
17	韓国中央大学赤十字看護学部	韓国	2014/2/21	学術交流	医学部
18	ソンクラーナカリン大学医学部	タイ	2017/7/9	学術交流・学生交流	医学部
19	国立台湾大学医学部	台湾	2011/10/11	学術交流・学生交流	医学部
20	首都医科大学口腔医学院	中国	2004/10/28	学術交流	医学部
21	ハワイ大学医学部	アメリカ	2016/2/21	学術交流・学生交流	医学部
22	セメイ国立医科大学	カザフスタン	2018/2/21	学術交流・学生交流	医学部
23	タイ農業局	タイ	2018/4/24	学術交流	農林海洋科学部
24	浙江大学生物系統工程及び食品科学学院	中国	2011/4/18	学術交流・学生交流	農林海洋科学部
25	シェレバングラ農科大学	バングラデシュ	2012/10/8	学術交流・学生交流	農林海洋科学部
26	チェコ共和国科学アカデミー微生物学研究所	チェコ	2017/8/9	学術交流	農林海洋科学部
27	ラクイラ大学土木建設建築環境工学部	イタリア	2018/6/18	学術交流・学生交流	地域協働学部
28	韓国地質資源研究院石油海洋資源部	韓国	2007/8/8	学術交流	海洋コア総合研究センター
29	中国科学院地球環境研究所	中国	2009/9/29	学術交流	海洋コア総合研究センター
30	アイスランド大学地球科学研究所	アイスランド	2018/4/4	学術交流	海洋コア総合研究センター
31	カリヤニ大学	インド	2012/10/10	学術交流	総合研究センター
32	フィリピン農業省漁業・水産資源局第2地域支所	フィリピン	2007/8/24	学術交流	黒潮圏科学部門

高知大学外国人留学生在籍状況

2019.05.01現在

項目 / 国名・地域名		国費								小計	私費								小計	計		合計
		学部		修士		博士		研究生等			学部		修士		博士		研究生等					
		男	女	男	女	男	女	男	女		男	女	男	女	男	女	男	女		男	女	
アジア	インド												1		1				2	2		2
	インドネシア						2			2					1		2	2	5	3	4	7
	カンボジア			1						1										1		1
	スリランカ											1							1		1	1
	タイ							1		1										1		1
	ネパール										2		1		2				5	5		5
	バングラデシュ					1	2			3			1		1	1			3	3	3	6
	フィリピン					3	6			9										3	6	9
	ベトナム										1	3		2	1				7	2	5	7
	マレーシア										1	1				1			3	1	2	3
	モンゴル										1	2		1					4	1	3	4
	ラオス							1		1										1		1
	韓国										2						2	4	8	4	4	8
	台湾											1	1				3	4	9	4	5	9
	中国						2			2	8	4	4	5	2	2	9	14	48	23	27	50
北米	アメリカ													1				1	2		2	2
南米	アルゼンチン					1				1										1		1
欧州	スウェーデン																2	1	3	2	1	3
	チェコ																	1	1		1	1
	フランス														1				1	1		1
アフリカ	エチオピア					1				1										1		1
	ガーナ			1						1										1		1
	コンゴ民主共和国														1				1	1		1
	ブルキナファソ												1						1	1		1
総計				2		6	12	2		22	15	12	9	9	10	4	18	27	104	62	64	126
学部	人文学部/人文社会科学部							1		1	3	6					3	8	20	7	14	21
	教育学部							1		1	1						11	11	23	13	11	24
	理学部/理工学部										6	3					1		10	7	3	10
	農学部/農林海洋科学部										2	1							3	2	1	3
	地域協働学部																					
	土佐さきがけプログラム										3	2						2	7	3	4	7
大学院総合人間自然科学研究科	人文社会科学専攻													2			1	3	6	1	5	6
	教育学専攻			1						1			1						1	2		2
	理学専攻												1					1	2	1	1	2
	応用自然科学専攻														1		1		2	2		2
	医科学専攻													1					1		1	1
	医学専攻					2	1			3					1	2		2	5	3	5	8
	農学専攻			1						1			7	6			1		14	9	6	15
	黒潮圏総合科学専攻					3	6			9					3				3	6	6	12
愛媛大学大学院連合農学研究科						1	5			6					5	2			7	6	7	13
総計				2		6	12	2		22	15	12	9	9	10	4	18	27	104	62	64	126

※ビザの種類が「留学」以外の者（短期滞在6、家族滞在1、日本人の配偶者等1、定住1）を除く。

2019年度の交換留学生数(実績)

2019年度の交換留学については以下のとおりです。

【交換留学生（受入れ）】

2019年4月～	17名
2019年7月～	6名（短期）
2019年9月～	16名（短期）
2019年10月～	48名
合計	87名

【交換留学生（派遣）】

2019年8月、9月～	16名
2020年1月、2月～	6名
合計	22名

（うち14名は新型コロナウイルスの影響により早期帰国しています。）